

上北島野町下遺跡

上北島川原田遺跡

常用前野遺跡

津島餅町遺跡 3次調査

福岡県筑後市所在遺跡の調査

2009

福岡県教育委員会

上北島野町下遺跡

上北島川原田遺跡

常用前野遺跡

津島餅町遺跡 3次調査

福岡県筑後市所在遺跡の調査



1 上北島野町下遺跡 空中写真（南から）



2 上北島野町下遺跡 1区空中写真（上が北）



1 上北島野町下遺跡 3号竪穴住居跡（北から）



2 上北島野町下遺跡 3号竪穴住居跡出土土器

序

福岡県教育委員会では、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受け、平成13年度から九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本報告書は、平成18・19年度に実施した福岡県筑後市大字上北島に所在する上北島野町下遺跡、上北島川原田遺跡、同市大字常用に所在する常用前野遺跡、同市大字津島に所在する津島餅町遺跡3次調査の記録です。これらの遺跡は、筑後市南部に広がる豊かな田園地帯に位置しています。調査では弥生時代から古墳時代前期の集落跡や、中世の遺構も確認するなど、この地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が、地域文化の研究や教育資料として、また文化財愛護思想の浸透に寄与できれば幸いです。

最後に、発掘調査・整理作業並びに報告書の作成に御協力・御助言をいただいた多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例　　言

- 1 本書は平成18・19（2006・2007）年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県筑後市大字上北島に所在する上北島野町下遺跡、上北島川原田遺跡、同市大字常用に所在する常用前野遺跡、同市大字津島に所在する津島餅町遺跡3次調査の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第13集となる。
- 2 本遺跡の発掘調査・整理報告は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真は、上北島野町下遺跡については一瀬智が、上北島川原田遺跡については進村真之が、常用前野遺跡については大庭孝夫が、津島餅町遺跡3次調査については泰憲二が撮影し、遺物写真是文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。空中写真是九州航空㈱、東亜航空技研㈱に委託した。
- 4 本書に掲載した遺構図は、上北島野町下遺跡については一瀬の他、橋崎俊平が作成し、石井正興・井上正人・猪口サエ子・今村孝男・今村幹治・江崎貞美・北野進・坂口八千代・稗田勝好が補助した。上北島川原田遺跡については進村が作成した。常用前野遺跡については大庭が作成した。津島餅町遺跡3次調査については秦が作成し、荒巻静美・古賀富士子・原秀美が補助した。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也の指導の下に実施した。出土遺物の実測は調査担当者の他に、城門義廣・平田春美・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・橋ノ口雅子・堀江圭子・若松美枝子・寺岡和子・栗林明美・中村洋子・中川真理子・中川陽子が行った。製図は調査担当者の他に、豊福弥生・原力ヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
- 6 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 7 本書の執筆は、担当した調査に従い、上北島野町下遺跡を一瀬が、上北島川原田遺跡を進村が、常用前野遺跡を大庭が、津島餅町遺跡3次調査を秦が行った。編集は各執筆者の協力を得て一瀬が行った。

目 次

卷頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I	はじめに（一瀬）	1
1	調査の経緯	1
2	調査の組織	3
II	位置と環境（一瀬）	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
III	上北島野町下遺跡の調査の記録（一瀬）	9
1	調査の概要	9
2	遺跡の概要と基本層序	13
1	遺跡の概要	13
2	基本層序	14
3	検出遺構と出土遺物	15
1	掘立柱建物跡	15
2	竪穴住居跡	16
3	土坑	25
4	溝・小溝	29
5	その他の出土遺物	33
4	小結	38
IV	上北島川原田遺跡の調査の記録（進村）	39
1	遺跡の概要と基本層序	39
2	検出遺構と出土遺物	40
1	土坑	40
2	溝	41
3	落ち	42
3	小結	42
V	常用前野遺跡の調査の記録（大庭）	43
1	はじめに	43
2	検出した遺構と遺物	46

3 小結	48
VII 津島餅町遺跡3次調査の記録(秦)	49
1 調査の概要	49
2 遺跡の概要と基本層序	50
3 検出遺構と出土遺物	52
1 溝状遺構	52
2 その他の遺物	55
4 小結	56
VIIまとめ(一瀬)	57
1 上北島野町下遺跡における出土遺構・遺物について	57
1 3号住居跡・ベッド状遺構	57
2 2・3号住居跡出土遺物について	58
3 野町焼について	58
2 おわりに	59

図版目次

巻頭図版 1	1 上北島野町下遺跡 空中写真(南から)
	2 上北島野町下遺跡 1区空中写真(上が北)
巻頭図版 2	1 上北島野町下遺跡 3号竪穴住居跡(北から)
	2 上北島野町下遺跡 3号竪穴住居跡出土土器

上北島野町下遺跡

図版 1	1 調査地遠景(東から)	2 1区全景(空中写真・上が東)
	3 2区全景(北から)	
図版 2	1 1号掘立柱建物跡(東から)	2 2・3号竪穴住居跡(空中写真・上が東)
	3 2号竪穴住居跡(東から)	
図版 3	1 3号竪穴住居跡遺物出土状況①(北から)	2 同②(ベッド上・東から)
	3 同③(ベッド下・東から)	
図版 4	1 1号土坑(南から)	2 2号土坑(北東から) 3 3号土坑(南から)
図版 5	1 4号土坑(東から)	2 5号土坑(南東から)
	3 6号土坑土層断面(東から)	
図版 6	1 7号土坑(北西から)	2 1号溝(東から) 3 2号溝(東から)
図版 7	1 3号溝(東から)	2 6号溝(西から) 3 2号小溝(東から)
図版 8	2号竪穴住居跡出土遺物	
図版 9	3号竪穴住居跡出土遺物①	
図版10	3号竪穴住居跡出土遺物②	
図版11	3号竪穴住居跡③・1号溝・6号溝・1区北拡張部①出土遺物	
図版12	1区北拡張部②・擾乱・包含層出土遺物	

上北島川原田遺跡

- 図版1 1 上北島川原田遺跡全景(北から) 2 上北島川原田遺跡全景(南から)
3 1号土坑(東から)
- 図版2 1 2号土坑(東から) 2 3号土坑(南から) 3 4号土坑(北から)
- 図版3 1 5号土坑(北から) 2 1号溝(北東から) 3 2号溝(北東から)
- 図版4 1 2号溝土層(西から) 2 段落ち部分(北から) 3 段落ち部分(南から)

常用前野遺跡

- 図版1 1 1区西壁土層(東から) 2 1区全景(北東から) 3 2区全景(北北東から)
図版2 1 1号溝(東から) 2 1号溝土層(東から) 3 出土遺物

津島餅町遺跡3次調査

- 図版1 1 津島餅町遺跡3次調査遠景(西上空から) 2 同上全景(上空から)
図版2 1 流路・1号溝状遺構(上空から) 2 基本層序(西から)
図版3 1 1号溝状遺構土層断面(西から) 2 2号溝状遺構土層断面(西から)
3 出土遺物

挿図目次

第1図 福岡県筑後市的位置	1
第2図 九州新幹線筑後市・大牟田市間埋蔵文化財調査地点(1/100,000)	2
第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	6
第4図 上北島野町下遺跡・上北島川原田遺跡周辺地形図(1/5,000)	10
第5図 上北島野町下遺跡遺構配置図(1/300)	11・12
第6図 上北島野町下遺跡調査区基本土層図(1/60)	14
第7図 1号掘立柱建物跡実測図(1/60)	15
第8図 1号掘立柱建物跡出土遺物実測図(1/3)	16
第9図 2号竪穴住居跡実測図(1/60)	16
第10図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)	17
第11図 3号竪穴住居跡実測図(1/60)	19
第12図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図①(1/3)	20
第13図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図②(1/3、25は1/6)	22
第14図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図③(1/3)	24
第15図 2・5号土坑出土遺物実測図(1/3)	25
第16図 1・2号土坑実測図(1/30、1/60)	26
第17図 3・4号土坑実測図(1/30)	27
第18図 5・6・7号土坑実測図(1/30、土5は1/60)	28

第19図	1・2・3号溝実測図(1/100、溝3と断面図は1/60).....	29
第20図	6号溝実測図(1/100、断面図は1/60).....	31
第21図	2号小溝実測図(1/30).....	31
第22図	1・2・6号溝・2号小溝出土遺物実測図(1/3).....	32
第23図	その他の出土遺物①(1/3).....	34
第24図	その他の出土遺物②(1/4).....	35
第25図	その他の出土遺物③(1/4、71・73は1/3).....	37
第26図	その他の出土遺物④(81は1/2、82は1/1).....	38
第27図	上北島川原田遺跡遺構配置図(1/400).....	39
第28図	1~3号土坑実測図(1/30).....	40
第29図	2号溝土層実測図(1/30).....	41
第30図	2号溝出土土器実測図(1/3).....	42
第31図	常用前野遺跡周辺遺跡分布図(1/5,000).....	43
第32図	調査区配置図(1/1,000).....	44
第33図	常用前野遺跡遺構配置図(1/300).....	45
第34図	1区西壁土層実測図(1/40).....	46
第35図	1号溝土層実測図(1/20).....	46
第36図	出土遺物実測図(1/3).....	47
第37図	常用前野遺跡地形図(1/20,000).....	47
第38図	津島餅町遺跡3次周辺地形図(1/5,000).....	49
第39図	調査区配置図(1/800).....	51
第40図	基本層序図(1/40).....	52
第41図	1・2号溝状遺構土層断面図(1/40).....	52
第42図	津島餅町遺跡3次遺構配置図(1/300).....	53・54
第43図	津島餅町遺跡3次出土遺物実測図(4~6は1/2、他は1/3).....	55
第44図	狐塚遺跡2号竪穴.....	57
第45図	狐塚遺跡11号竪穴.....	57

表 目 次

第1表 九州新幹線鹿児島ルート築後市・大牟田市間埋蔵文化財調査地点一覧..... 1

I はじめに

1 調査の経緯

九州新幹線（鹿児島ルート）は整備新幹線計画の一つであり、国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設され、主たる区間を列車が時速200km以上の高速度で走行できる幹線鉄道であり、博多から熊本・新八代を経由して鹿児島中央に至る総延長257kmの路線である。このうち新八代～鹿児島中央間については既に平成16年3月13日に部分開業しているが、全線開業すれば博多～鹿児島中央間が最速約1時間20分で、さらに平成19年10月17日のJR九州とJR西日本との合意で、九州新幹線と山陽新幹線の相互直通運転が

決定したことによって鹿児島中央～新大阪間が約4時間で結ばれることとなり、新たな産業の立地や観光産業の振興等に寄与するものとして期待されている。

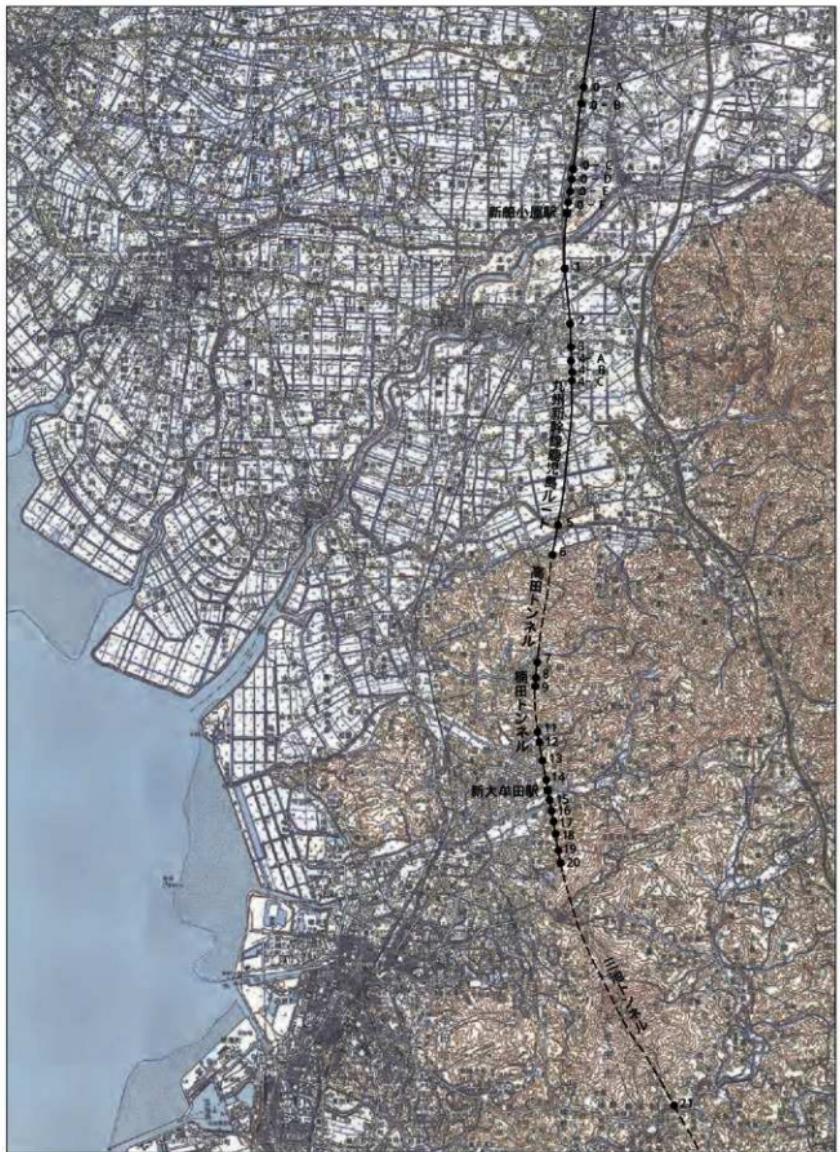
鹿児島ルートのうち船小屋～新八代間については、平成10年3月12日に工事実施計画が認可され、同年3月21日に建設工事が起工されている。福岡県は平成10年4月8日に企画振興部交通対策課のも



第1図 福岡県筑後市の位置

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査年度	報告年度	備考
0-A	野町	上北島野町下遺跡	筑後市大字上北島	1770	1720	H19	H20	調査終了
0-B	野町	上北島原田遺跡	筑後市大字上北島	1000	300	H18	H20	調査終了
0-C	船小屋駅	常用前野遺跡	筑後市大字常用	820	265	H18	H20	調査終了
0-D	船小屋駅	津島町内遺跡	筑後市大字津島	470	470	H19		筑後市調査
0-E	船小屋駅	津島側町遺跡	筑後市大字津島	7538	7538	H19	H20	調査終了
0-F	船小屋駅	津島洲洲内遺跡2次調査	筑後市大字津島	1500	1500	H18		筑後市調査
1	瀬高北	郡領ノ遺跡	みやま市瀬高町坂田	4480	1107	H16	H17	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5600	5300	H16・17	H18・19	調査終了
3	瀬高南	藤ノ屋跡赤堀跡	みやま市瀬高町山門	3360	5500	H15・16	H19～21	調査終了
4-A	瀬高南	山門北遺跡	みやま市瀬高町山門	1700	115	H15	H18	調査終了
4-B	瀬高南	山門田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田	6340	1175	H14・15	H17	調査終了
4-C	瀬高南	松田馬塚遺跡	みやま市瀬高町松田	360	2050	H13～15	H16・17	調査終了
5	高田田尻	海津原馬塚遺跡	みやま市高田町海津	4200				
6	高田田尻	飯田遺跡	みやま市高田町田尻	0				
7	高田T	みやま市高田町上鶴田	3300					
8	楠田T	上楠田松浦遺跡	みやま市高田町上楠田	3520	560	H16	H17	高田町調査
9	楠田T	上楠田垣田遺跡	みやま市高田町上楠田	6000	870	H16	H17	高田町調査
10	楠田T	みやま市高田町上楠田	3300					
11	楠田T	大牟田市大字宮崎	5200					
12	楠田T	駒遊堂古墳群	大牟田市大字岩本	4000				
13	楠田T	駒遊堂古墳群	大牟田市大字岩本	8400				
14	楠田T	コシロ畠遺跡	大牟田市大字岩本	2576				
15	大牟田S-T	白銀川谷里	大牟田市大字岩本	3360				
16	岩本	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1344	1000	H18	H19	調査終了
17	岩本	岩本上定原遺跡・貝殻塚古墳	大牟田市大字岩本	2240				
18	岩本		大牟田市大字岩本	896				
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部	5000				
20	岩本		大牟田市大字宮部	5400				
21	三池T		大牟田市大字教采木	896				

第1表 九州新幹線鹿児島ルート筑後市・大牟田市間埋蔵文化財調査地点一覧



第2図 九州新幹線筑後市・大牟田市間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)

と、関係部局で「九州新幹線鹿児島ルート情報連絡会議」を設置し、九州新幹線鹿児島ルートに関する情報等についての連絡調整を行うこととした。

本書で報告する福岡県筑後市の野町工区から船小屋駅高架橋工区については、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（以下九州新幹線建設局）から平成17年6月8日付けで試掘調査依頼文書を受けた。この区間は九州新幹線船小屋駅の設置決定が遅れた等の理由により、用地買収・工事が遅れており、用地取得終了箇所から順次試掘調査を実施し、発掘調査が終了または遺跡が無いと判断された範囲は早急に工事に取り掛かりたいとの九州新幹線建設局側の強い意向があった。このため平成18年11月以降、条件が整った箇所から福岡県教育庁総務部文化財保護課（以下県教委）が筑後市教育委員会と共に試掘調査を実施し、遺跡が確認された箇所には、できる限り速やかに本調査に着手し、同時に周辺の試掘調査も並行して進めることになった。上北島川原田遺跡調査地については11月15～20日、上北島野町下遺跡調査地は11月21～22日、常用前野遺跡調査地は11月24日、津島餅町遺跡調査地は11月28～30日に試掘調査を実施している。なお、各遺跡における調査の経緯については各章で詳述する。

2 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は以下のとおりである。

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局

	平成18年度	平成19年度	平成20年度
局長	元木 洋	元木 洋	元木 洋
次長	閑根 茂	閑根 茂	閑根 茂
用地第一課長	高橋秀幸	高橋秀幸	西岡英郎
用地第一課担当係長	入江万久 房野和清	入江万久 房野和清	入江万久 小川秀平
工事第三課長	北原太一	北原太一	木下哲龍
工事第三課補佐	弓削伸二	三輪龍四郎	三輪龍四郎
工事第三課担当係長	林 孝治	林 孝治	林 孝治
久留米鉄道建設所長	奥村誠治	岡田良平	岡田良平
担当副所長	武田一彦	武田一彦	今野雅宏
大牟田鉄道建設所長	長谷川正明	長谷川正明	明田重憲
担当副所長(船小屋)	福田 聰	宮越雄幸	宮越雄幸
	石津範彦	石津範彦	石津範彦

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	平成18年度	平成19年度	平成20年度
総括	(発掘調査)	(発掘調査・整理)	(整理報告)
教育長	森山良一	森山良一	森山良一
教育次長	清水圭輔	樋崎洋二郎	樋崎洋二郎
総務部長	大島和寛	大島和寛	大島和寛

文化財保護課長	磯村幸男(本副理事)	磯村幸男(本副理事)	磯村幸男(本副理事)
副課長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊元明
課長技術補佐	小池史哲(本参事)	小池史哲(本参事)	小池史哲(本参事)
参事	新原正典	新原正典	新原正典
課長補佐	安川正郷(本参事)	中園 宏(本参事)	前原俊史(本参事)
庶務			
管理係長	井手優二	井手優二	富永育夫
事務主査	野中 顯	測上大輔	藤木 豊
主任主事	柏村正央	柏村正央	近藤一崇
	小宮辰之	小宮辰之	小宮辰之
		野田 雅	野田 雅
調査・整理・報告			
調査第二係長	飛野博文(本参事補佐)	飛野博文(本参事補佐)	飛野博文(本参事補佐)
参事補佐	濱田信也	濱田信也	濱田信也
技術主査		秦 恵二	秦 恵二
主任技師	秦 恵二	進村真之	進村真之
	進村真之	一瀬 智	
	大庭孝夫		
	一瀬 智		
技師		城門義廣	城門義廣
九州歴史資料館主任技師		大庭孝夫	大庭孝夫
			一瀬 智

発掘調査および整理期間中には、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局工事第三課の担当の方々、地元の筑後市教育委員会社会教育課文化スポーツ係の永見秀徳・小林勇作・上村英士の各氏、野町BL他工事を担当した大成・西武・柿原特定建設工事共同企業体（JV）船小屋駅高架橋を担当した大成・大木・石山JVの工事事務所の方々、また現場近隣の方々など多くの方に御教示・御協力・御支援をいただいた。

現場作業には、周辺各地から多くの方々に作業員としてご参加いただいた。さまざまな悪条件の中、熱心に作業にあたられた皆様に心から感謝申し上げます。

II 位置と環境

1 地理的環境

福岡県の南部から佐賀県南東部に広がる筑紫平野は、筑後川の開析・堆積作用によって、その中流域に形成された両筑平野と、筑後川下流域 - 有明海沿岸域に形成された筑後平野・佐賀平野に区分される。定平な地形と肥沃な土壌、豊かな水資源に恵まれて、古くから活発な人間生活が営まれてきた地域である。福岡県筑後市は、県南西部に広がる筑後平野のほぼ中央、東経 $130^{\circ}30'$ ・北緯 $33^{\circ}12'$ に位置する。筑後平野東部から西・南流して有明海に注ぐ矢部川の中流右岸にあたり、北は久留米市、南はみやま市・柳川市、東は八女市・八女郡広川町、西は三潴郡大木町と接する。市域の中央をJR鹿児島線と国道209号線が南北に縦貫し、東西に走る国道442号線と市中心部で交差する交通の要衝である。

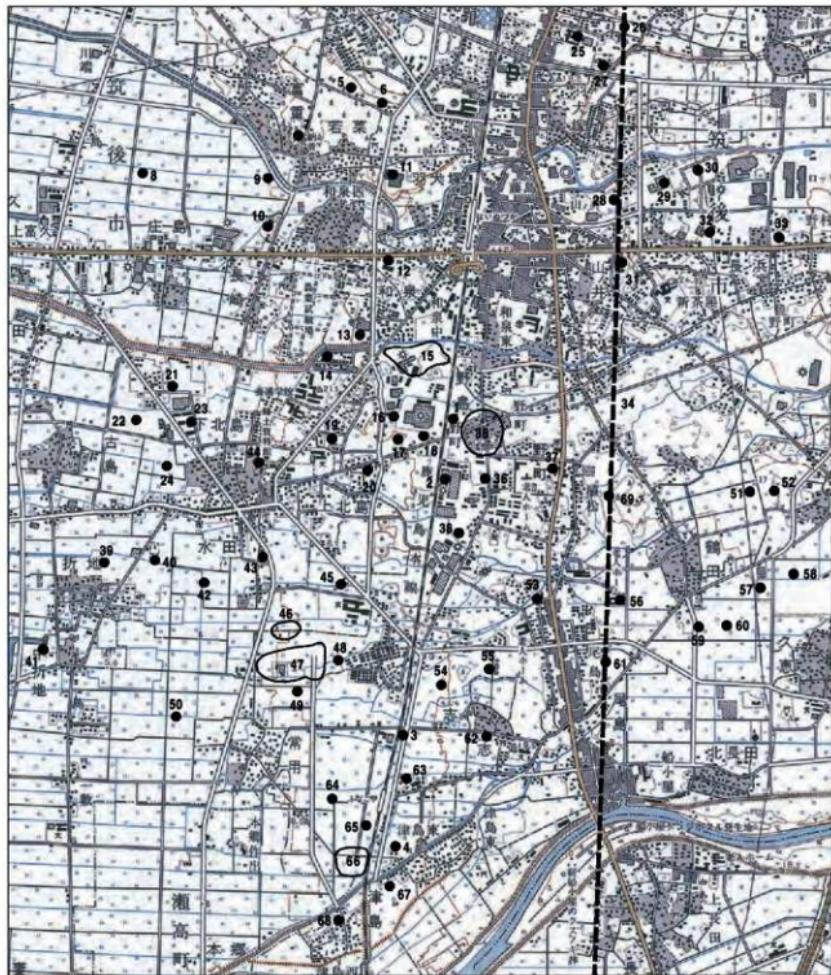
市域の北・東部には耳納山地から派生した洪積台地の八女丘陵が延び、段丘面には灌漑用の溜池が点在するほか、果樹園や茶畠が広がっている。そこから南に向けて低位段丘に連なるなどらかな傾斜地が広がり、果樹園・茶畠のほか、侵食により東西方向に刻まれた開析谷には水田が営まれる。低位段丘は市の中央部に広がり、西側は沖積低地に埋没する。段丘間を人工灌漑河川の山ノ井川・花宗川が西流し、水田が営まれるほか、市中心地もこの段丘面に存在し、市街地が縦横の国道に沿うように形成されている。市南東部から矢部川北岸は扇状地性の低地で、南端に矢部川の洪水堆積による自然堤防がある。大部分は水田だが、堤防上は集落のほか、畠地・茶畠・果樹園として利用される。南西部は筑後川・矢部川水系の堆積による標高5m以下の三角州性低地で、クリーク網が発達している。このように筑後市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠中心、東部や南西部には米麦中心の農業が展開されている。

また、昭和48年(1973)に八女市と境界を接する筑後市長浜の国道442号線に、九州自動車道八女インターチェンジが開設されたことは、大企業の工場や流通センターの進出へつながり、地域の社会環境に大きな変化を与えている。さらに近年は福岡市・久留米市のベッドタウンとして市中心～北部を中心に人口の増加がみられ、住宅都市としての様相を強くしている。

2 歴史的環境

市内の旧石器時代の遺跡としては、北部の藏敷遺跡や東部の鶴田東大坪遺跡で遺物が出土しているが、遺構は確認されていない。縄文時代になると、市の中央～南部に集中して遺跡が確認されている。津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡などでは、早期と思われる石組炉を検出している。若菜遺跡や鶴田岸添遺跡、水田正吹遺跡では同じく早期と考えられる落とし穴が確認された。鶴田岸添遺跡の西約200mの尾島集落の北側には、早期の集落として著名な裏山遺跡がある。前～中期の状況は判然としないが、後～晩期になると数点の資料が知られる。常用遺跡や上北島塚ノ本遺跡では夜臼式土器のほか、弥生時代初期の土器が多く見つかっており、過渡期の土器の様相が伺える良好な資料である。

弥生時代は、中期初頭までの集落が、縄文時代と同様に市の南半部に偏って見つかっている。中期の後半になると、北部の丘陵上や南部の低平地にも展開して、遺跡数が爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、常用長田遺跡や常用日田行遺跡、水田上平塚遺跡が知られ、津島九



1. 上北島野町下道跡
2. 上北島川原田道跡
3. 菅前田野道跡
4. 津島御町道跡
5. 若草大塙道跡
6. 若草朝ノ本道跡
7. 若草絆跡
8. 若草立萩道跡
9. 若草湖ノ江道跡
10. 長賀坊田道跡
11. 若草森坊道跡
12. 和琴小山口道跡
13. 和琴近道蓋跡
14. 下北島櫻引道跡
15. 上北島井戸口道跡
16. 上北島花屋道跡
17. 上北島塚ノ本道跡
18. 手比道跡
19. 上北島高輪道跡
20. 上北島前田道跡
21. 下北島久清道跡
22. 古北根崎道跡
23. 下北島久子道跡
24. 横道跡
25. 羽大保中道道跡
26. 羽大保山ノ前道跡
27. 羽大保射場ノ本道跡
28. 山ノ井川口道跡
29. 徳久中牟田道跡
30. 桂木中須道跡
31. 山ノ井南野道跡
32. 長谷田道跡
33. 佐野道跡
34. 西海道跡
35. 野町挽突跡
36. 野町南原ノ下道跡
37. 野町小原ノ内道跡
38. 上北島平塚道跡
39. 新北島開寺道跡
40. 水田伊勢ノ陸道跡
41. 中折地内栗道跡
42. 水田正吹道跡
43. 水田下程町道跡
44. 水田天満宮
45. 水田山ノ元道跡
46. 水田上平宮石道跡
47. 常陸日田行道跡
48. 水田中ノハバ道跡
49. 水田伊豆道跡
50. 水田道跡
51. 鶴田東大坪道跡
52. 鶴田西桜道跡
53. 黒山道跡
54. 志野奈道跡
55. 志新ノ内・八反田道跡
56. 鶴田海道跡
57. 新瀬松原道跡
58. 新瀬丸田道跡
59. 鶴田畠道跡
60. 鶴田柳原道跡
61. 鶴田市ノ塚道跡
62. 志前田道跡
63. 津島町内道跡
64. 津島海側生瀬道跡
65. 津島南ヶ原道跡
66. 津島大坪道跡
67. 津島無名道跡(2次)
68. 津島柳原道跡
69. 鶴田木屋ノ角道跡

第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

反坪遺跡では前期の溜井が出土している。中期後半以降の集落では蔵敷森ノ木遺跡、津島皿ヶ町遺跡、水田杉ノ元遺跡や焼失住居が見つかった鶴田岸添遺跡がある。後期には古島櫻崎遺跡・下北島久清遺跡で大規模な集落が確認されている。終末期には、古墳時代初頭まで続く狐塚遺跡が著名である。また鶴田西畠遺跡、津島南佛生遺跡なども弥生時代から古墳時代に継続する集落遺跡である。

古墳時代は、市北部の丘陵部に展開する石人山古墳、欠塚古墳、瑞王寺古墳がよく知られている。集落遺跡では、狐塚遺跡の西200mに位置する上北島花畠遺跡で、古墳時代と考えられる竪穴住居跡を検出してあり、狐塚遺跡を中心とする集落の広がりが想定される。

古代には、大宰府と肥後・薩摩方面を結ぶ西海道が筑後市域を南北に縦貫する。発掘調査でも鶴田市ノ塚遺跡、鶴田木屋ノ角遺跡、山ノ井川口遺跡、山ノ井南野遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡などで、道路遺構の側溝や硬化した路面、波板状の連続土坑などからなる官道跡が確認されている。また「延喜式」にみえる葛野駅は筑後市付近にあったと考えられている。羽犬塚中道遺跡では「□郡符葛□」と墨書きされた土師器も出土している。集落では、若菜森坊遺跡で竪穴住居で構成される大規模な集落跡が確認されているほか、羽犬塚中道遺跡、羽犬塚射場ノ本遺跡、和泉小山口遺跡、狐塚遺跡の北側に位置する上北島井原口遺跡などで、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見つかっている。

中世には居館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には寺社領を中心に荘園が発達し、荘園支配を基盤にした地域社会の形成がみられる。具体的には市域の北半部から北に隣接する広川町にかけては熊野社領の広川荘が、市域の中央部から南部には安楽寺領の水田荘・葛野荘・下妻荘が展開している。これら荘園の境界付近には、「屋敷」や「坊」といった小字名が多く残り、対峙する各荘園が配した屋敷地と考えられている。「コ」の字型に廻る区画溝や井戸を確認した長崎坊田遺跡や、方形状の区画溝と複数の掘立柱建物跡を確認した若菜森坊遺跡などがこれにあたる。また、14~16世紀の道路状遺構を検出した櫻崎遺跡、道路状遺構と区画溝を検出した鶴田樋原遺跡、集落の下限が16世紀後半と想定される掘立柱建物跡群・井戸・溝を検出した鶴田市ノ塚遺跡、掘立柱建物跡群・柵・井戸・土坑・溝を検出し、15世紀~16世紀を中心とする遺物が多く出土した中折地内栗遺跡など近年資料が増えてきており、今後矢部川流域における当該期の在地土器編年や集落構造の解明などが期待される。なお、13世紀には安楽寺領水田荘が成立し、その後14世紀までには鎮守社として老松社・現水田天満宮が創建される。以後、水田は安楽寺留守別当大鳥氏による社領経営の中心地として発展する。周辺には、鍛冶関連遺構が確認された水田下桜町遺跡や16世紀代の上北島篠島遺跡などが点在する。

近世には、筑後市域は立花氏、田中氏の支配を経て、元和6年(1620)末以降は有馬久留米藩領となる。城下町久留米のほか、周辺村落地域には物資の集散地、経済の中心地としての役割を担う在郷町が設けられ、羽犬塚町・盛徳町(一条)・水田町・尾島町・西牟田町が整備されている。併せて古代・中世以来の街道も改変・整備され、市域には南北に薩摩街道、東西に福島往還が通った。街道筋にあたる在郷町は、宿場町としても発展し、特に羽犬塚町には久留米藩三宿の一つとして御茶屋も建設された。

引用・参考文献

- 『筑後市史』第1巻 筑後市 1997
『狐塚遺跡』筑後市教育委員会 1970
『福岡県の地名』平凡社 2004
筑後市文化財調査報告書第7集『櫻崎遺跡』筑後市教育委員会 1991
筑後市文化財調査報告書第21集『筑後西部第2地区遺跡群I』筑後市教育委員会 1999
筑後市文化財調査報告書第23集『長崎坊田遺跡』筑後市教育委員会 1998
筑後市文化財調査報告書第26集『筑後西部第2地区遺跡群II』筑後市教育委員会 2000
筑後市文化財調査報告書第29集『筑後西部地区遺跡群II』筑後市教育委員会 2000
筑後市文化財調査報告書第33集『筑後市内遺跡群II』筑後市教育委員会 2001
筑後市文化財調査報告書第39集『上北島篠島遺跡』筑後市教育委員会 2002
筑後市文化財調査報告書第44集『筑後市内遺跡群III』筑後市教育委員会 2002
筑後市文化財調査報告書第45集『筑後市内遺跡群IV』筑後市教育委員会 2002
筑後市文化財調査報告書第47集『羽犬塚中道遺跡I』筑後市教育委員会 2003
筑後市文化財調査報告書第48集『羽犬塚山ノ前遺跡』筑後市教育委員会 2003
筑後市文化財調査報告書第49集『羽犬塚源ヶ野遺跡』筑後市教育委員会 2003
筑後市文化財調査報告書第54集『中折地内栗遺跡』筑後市教育委員会 2004
筑後市文化財調査報告書第72集『古島櫻崎遺跡』筑後市教育委員会 2006
筑後市文化財調査報告書第73集『筑後市内遺跡群VIII』筑後市教育委員会 2006
筑後市文化財調査報告書第77集『狐塚遺跡II』筑後市教育委員会 2007
福岡県文化財調査報告書第214集『和泉小山口遺跡』福岡県教育委員会 2007

上北島野町下遺跡

III 上北島野町下遺跡の調査の記録

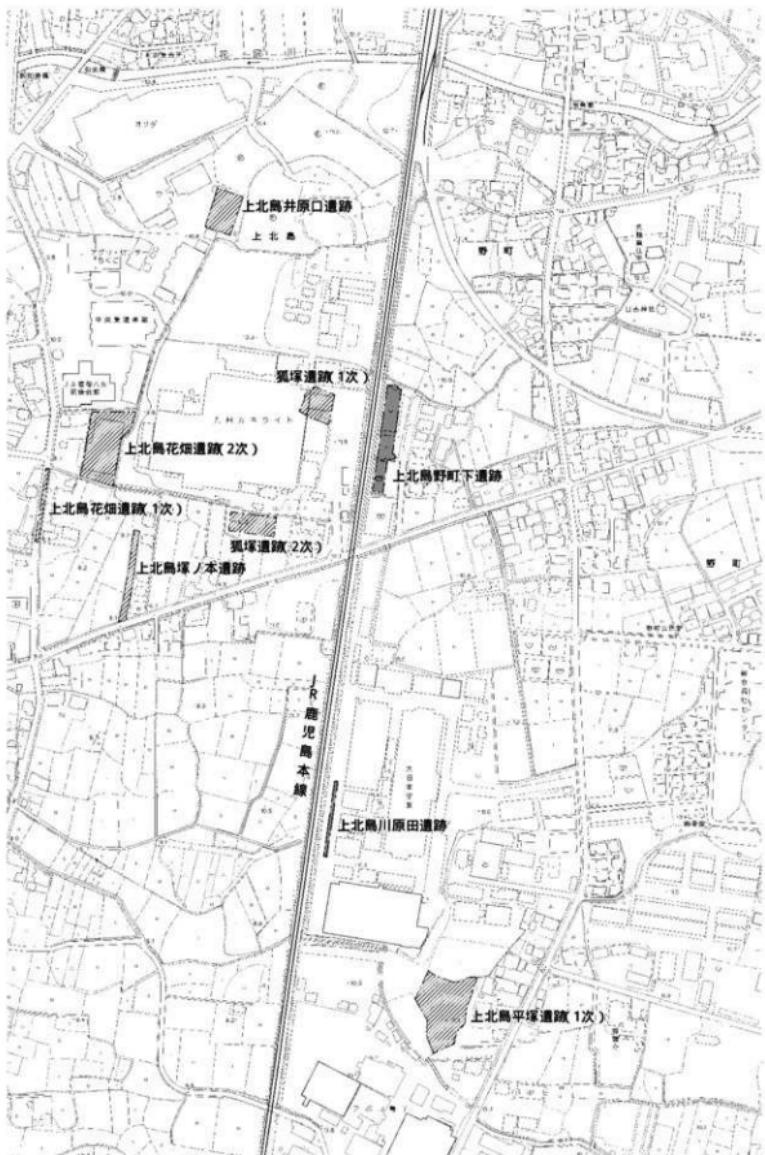
1 調査の概要

上北島野町下（かみきたじまのまちした）遺跡は、筑後市南部の田園地帯に位置する。行政区区分上は大字上北島と大字野町にまたがるが、地形上は東側の野町集落が広がる標高約12mの低位段丘の西辺縁部にあたる。周辺には、JR鹿児島線を挟んで西側に狐塚遺跡が隣接する。狐塚遺跡は1969年と2006年に発掘調査が行われ、弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落と、中世の溝が確認されている¹⁾。また、野町集落には近世から現代まで続く野町焼の窯跡が分布し、筑後市文化財分布地図にも「野町焼窯跡群」（文化財番号1316-4）として明記されている²⁾。以上のような立地にあることから、平成17年6月8日付で九州新幹線建設局より試掘調査依頼文書を受け、用地取得の終了後、平成18年11月21～22日にかけて、県教委と筑後市教育委員会が共同で試掘調査を実施した。その結果、大字上北島1014・1015・1016番地の区間に遺構・遺物を確認し、本調査が必要である旨を回答した。

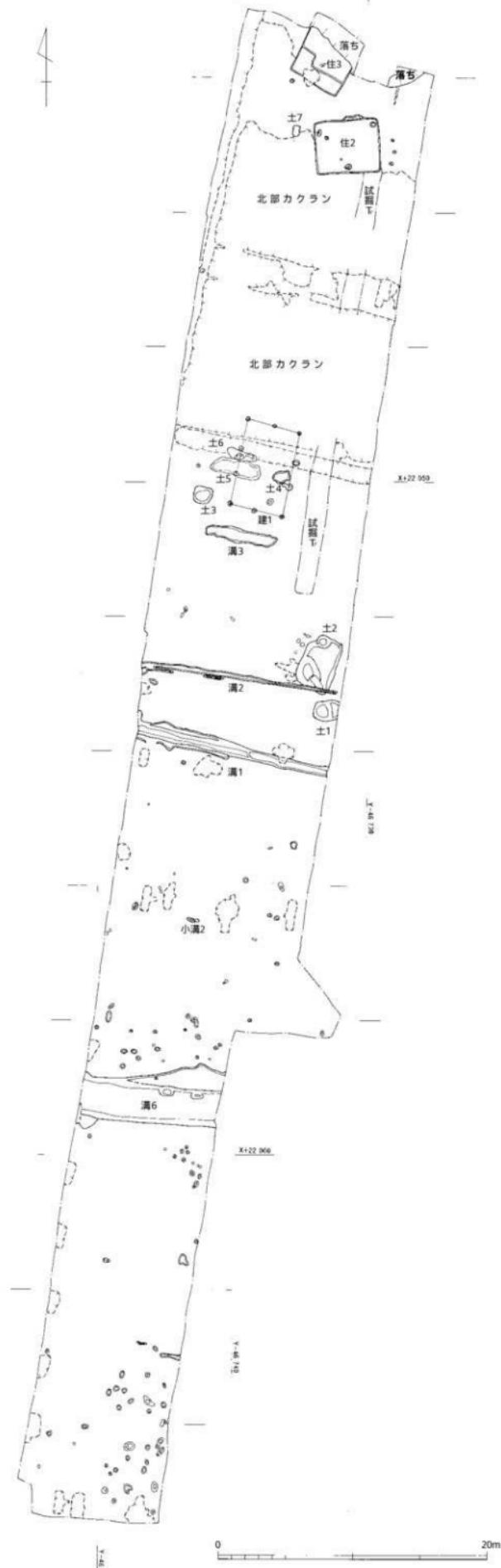
なお、調査終了後に確認したのだが、2007年3月に発行された『鶴見山古墳3』のなかで、佐賀大学（当時）の佐田茂氏が「昭和28年（1953）年頃の航空写真によると、筑後市北島字狐塚に前方後円墳の名残りのような地割りが残っているのが分かる。」と指摘されている³⁾。その場所は本遺跡の北西に位置し、本遺跡北側の隣接地は、前方後円墳東側の周溝にあたる可能性がある。今回の調査に先立つ試掘調査では、この箇所も併せて調査を実施したが、遺構・遺物ともに確認されなかったことを報告しておく。

本遺跡の調査対象地は野町集落の西縁部にあたり、東西約11～16m・南北約120mと縦長の形状である。このうち北側約1300m²を1区、南側約400m²を2区とするが、これは、1区が調査開始当初からの調査範囲、2区はその南側に立つ(有)九州環境美装センターの倉庫建物の撤収後に調査を行った範囲で、両者にタイムラグが生じたため、便宜的に付けたものである。また、1区は筑後市大字上北島字野町下、2区は同市大字野町字下出口と、2行政区に分かれて所在するが、遺跡名は調査開始当初の対象地であり、また後述するように、本遺跡の遺構の多くが分布する1区の地名より付けている。

以下、具体的な調査の経過を述べる。平成19年2月21日より1区における重機での表土剥ぎを開始した。遺構面までの深さは浅く、当初作業は順調に進んだが、調査区中央付近では広く搅乱を受けて遺構面が失われていた。この搅乱がどの範囲まで広がるのか試掘結果でも判断が着いておらず、残る遺構面を失わないように、慎重に作業を進めた。このため結果的には表土剥ぎにやや手間取ることになった。3月6日には作業員を投入し、人力での掘削を開始した。年度末には一度作業を止める必要があることが既に分かっていたため、この段階では必要最低限の機材のみ持ち込み、作業も遺構の検出と、搅乱の掘削に止めた。3月26日には作業を一度休止し、機材の撤収を行った。年度が改まって平成19年4月19日より改めてプレハブ等の機材を搬入し、翌20日より、作業員を投入しての作業を再開、本格的に遺構の掘削作業に入った。5月10日には、調査区南の隣接地に南北に連なって立つ(有)九州環境美装センターの倉庫2棟のうち、北側倉庫の箇所で試掘調査を実施し、1区の南端に続く包含層と遺構面を確認した。このため、この部分を2区として、1区と併せて調査を行うこととした。5月15日には南側倉庫部分で試掘を行ったが、遺



第4図 上北島野町下遺跡・上北島川原田遺跡周辺地形図(1/5,000)



第5図 上北島野町下遺跡遺構配置図(1/300)

構面は過去に削られており、近現代の遺物しか確認されなかったことから、この部分については調査不要とした。1区の作業は、気候も良く、天気に恵まれたため順調に進めることができ、5月23日にはラジコンヘリによる1区の空中写真撮影を行った。そして翌24日には重機による2区の表土剥ぎを開始し、5月29日より2区の人力での掘削を開始した。6月8日には2区での掘削作業もほぼ終えて全景写真を撮影し、6月13日には実測等全ての作業を終えた。調査終了後にはすぐに工事に着手するため埋め戻しは不要ということで、6月18日に用地を引き渡し、機材の撤収を含め、調査を完全に終了した。

2 遺跡の概要と基本層序

1 遺跡の概要

上北島野町下遺跡は、筑後市南部の田園地帯に位置し、その西側には弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落遺跡を主体とする狐塚遺跡が広がっている。今回の調査に先立つ試掘調査でも竪穴住居跡と考えられる遺構を確認しており（本調査の2号竪穴住居跡）、狐塚遺跡より続く集落の広がりが想定された。

1区では、北より約300mという広い範囲で遺構面が破壊されていた。このためもあって、遺構密度はさほど高くなく、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡2棟、土坑7基、溝・小溝5条、その他ビット多数を検出した。この大規模な攪乱（以下北部攪乱）については、粘土探掘によるものか、深いところでは30cm程の深さまで削られている。1号掘立柱建物跡のように、攪乱埋土下に遺構の一部が残っている可能性があるため完掘したが、他に遺構は確認できなかった。竪穴住居跡2棟はこの北部攪乱の北側に隣接して検出した。このため、攪乱で失われた遺構面に、他の住居跡が広がっていた可能性は高いと考える。北部攪乱の南側では、掘立柱建物跡1棟を始め、12～16世紀にかけての中世の遺構を主に確認した。2区では、中世末の溝1条と多数のビットを検出している。

なお、1区の各所で平面プランが凸形や長方形、あるいは不整形で、黒褐色粘質土に黄褐色土ブロックを含む埋土を持つ土坑を17基ほど検出した。深さは1m程度で、最下層には太い鉄製のワイヤーが巻き付けられた丸太が埋設されていた。これらは木製の送電線を支える基礎と考えられ、本書で報告する上北島川原田遺跡の他、九州新幹線関係では、三浦郡三浦町（現久留米市三浦町）大字西牟田の西牟田平野遺跡（2次調査）で同様の遺構が確認・報告されている⁴。本遺跡では攪乱として取り扱っている。

また、調査中に遺構として記録したが、整理作業の過程で近代以降の攪乱と判断されたものがある。この場合、作業上の混乱を避けるために、遺構番号の変更を行わず欠番として報告している。

2 基本層序

本遺跡は調査前には1区は畠地、2区は宅地（倉庫）として利用されていた。2区も盛り土



送電線基礎の丸太出土状況

されて倉庫が建つ以前は畠地もしくは水田として利用されていたと考えられる。

標高は1区北側で約11.2~11.3m、1区南側で11.0~11.1m、2区の旧表土上で10.8~10.9mである。調査地の周囲では、調査地北側に広がる水田の田面標高は10.8

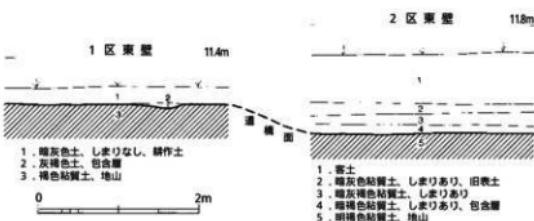
m、東の野町集落内の道路は標高12.0m、調査地南を東西に走る道路は標高12.1m、その南側の水田の田面標高は10.9m、JR線を挟んで西の狐塚遺跡調査地南側の畠地の耕作面は標高10.0mで、遺跡がのる台地が野町集落から西に突き出し、その西・南・北が緩やかに下る地形となる。

基本層序は第6図に図示した。1区から確認すると、表土は耕作土で、厚さは20~30cm、その下に灰褐色土の包含層（2層）が部分的に残り、明褐色~褐色粘質土（3層）からなる遺構面に至る。遺構面の検出レベルは11.0~10.8mで、南になるに従って緩やかに下がり、土色も黒みを帯びてくる。2区では現地表から60cmほど、倉庫用地造成時の客土があり、その下に旧表土の暗灰色粘質土（2層）が厚さ10~20cm認められる。その下に同10~15cmの暗灰色粘質土（3層）と同約10cmの暗褐色粘質土（4層）があり、明褐色粘質土の遺構面に至る。遺構面の検出レベルは約10.5mである。

調査対象地の中で比較的標高が高い1区において、遺構面までの深さが浅いということは当然ともいえるが、耕作土直下に遺構面が確認され、一部残る包含層を除いて、間に粘質土系の堆積がみられないことは、やや不自然な感がある。1区では粘土探掘によると考えられる北部擾乱が広い範囲で確認されており、耕作土~遺構面間の粘質土が瓦や窯道具など窯業用の粘土として持ち去られたことも推測できる。包含層が部分的にしか残らないこともこれを傍証していよう。このため、本調査地における中世以前の生活面は、周辺道路と同じ標高12m近くまであったことが想定される。

註

- 『狐塚遺跡』筑後市教育委員会 1970、筑後市文化財調査報告書第77集『狐塚遺跡Ⅱ』筑後市教育委員会 2007
- 『筑後市文化財分布地図』筑後市教育委員会 2004
- 佐田茂「鶴見山古墳の時代」(八女市文化財調査報告書第78集『鶴見山古墳3』)八女市教育委員会 2007)
- 九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集『西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡(2次調査)』福岡県教育委員会 2006



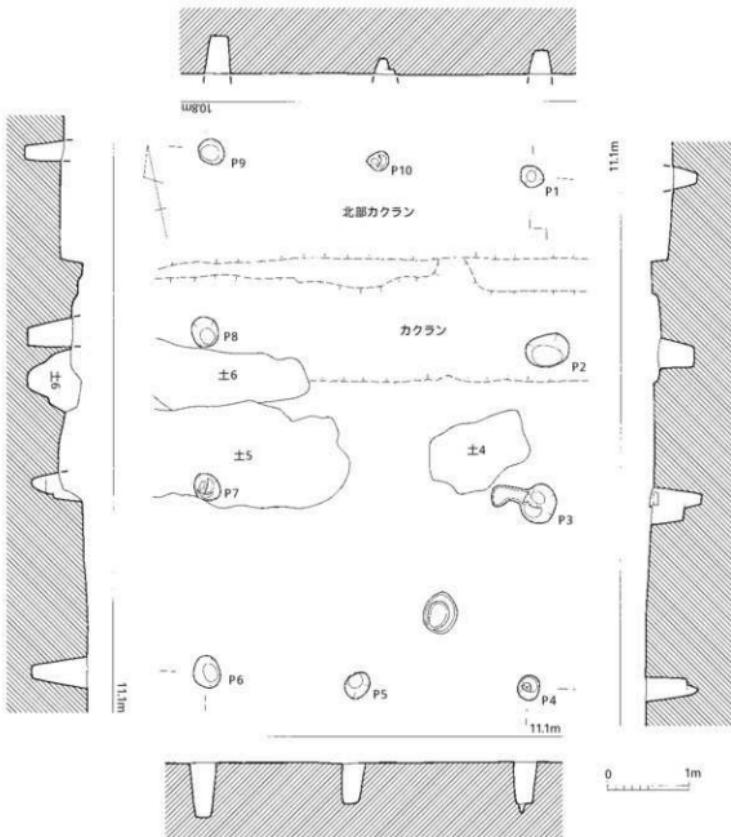
第6図 上北島野町下遺跡調査区基本土層図(1/60)

3 検出遺構と出土遺物

1 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第7図、図版2）

1区中央部で検出した。5号土坑や搅乱に切られる。南北3間×東西2間の倒柱建物で、北東隅にある柱穴から時計回りにP1～P10とした。このうちP1とP9・10は北部搅乱を掘りあげた下から検出したもので、上半2/3程度が失われている。各柱間の心々距離は1.8～2.2mを測る。柱穴のプランは概ね径30～40cm、深さ56～68cm。遺物はP7を除くすべての柱穴で確認できたが、ほとんどが土器・粘土塊の小粒で、固化できたのは次の2点である。出土遺物から12世紀前後に



第7図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

遡る可能性がある。

出土遺物（第8図） 1・2は土師質土器のそれぞれ小皿と壺の底部破片である。1はP5から出土したもので、底径52cmに復元される。底部内面はナデ、外面がへら切り後にナデ。12世紀頃か、焼成は不良で、胎土は精良。全体的に黄灰褐色を呈する。2はP3出土で、復元底径6.6cm、残存高は1.3cm。内面は底部と体部の境が明瞭でなく、緩やかな曲線となる。調整は内面にナデが認められるが、外面は摩滅して不明瞭である。焼成はやや不良で、胎土に橙色粒を含む。色調は暗灰褐色である。

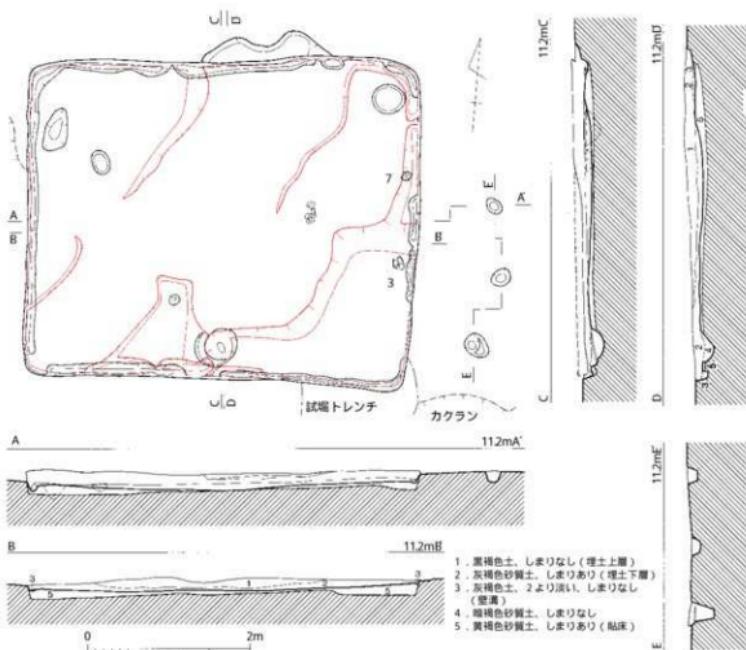
2 穫穴住居跡

2号竪穴住居跡（第9図、図版2）

1区北部の中央や東側で検出した。南半分が北部擾乱で削られるが、床面は残る。主軸は東-西で、長軸48m、短軸3.9mの長方形プランである。床面までの深さは、壁の残りが良い北西隅付近で17cm。床面は概ね平坦で、5基のピットを確認した。主柱穴は南壁沿い中央の1基は可能性があるが、他はプランや位置、深さなどから不明とせざるを得ない。壁沿いの床面にはほぼ



第8図 1号竪立柱建物跡出土
遺物実測図 (1/3)

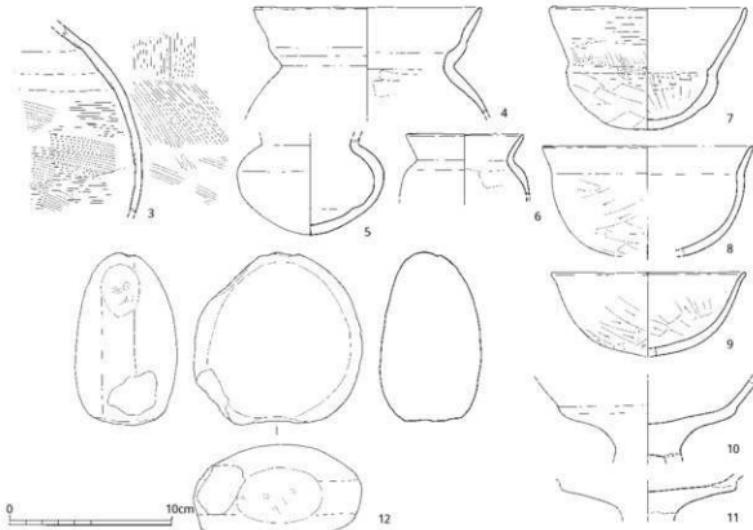


第9図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

周囲にわたって壁溝が設けられている。床下の掘り込みは不整形で、東から南の壁沿いと、北西隅付近にみられる。壁面の残存状況からも伺えるが、全体的に上部が大きく削られており、遺構埋土の残りも非常に薄い。大きく黒褐色土の上層（1層）と灰褐色砂質土の下層（2層）に分かれ、いずれからも遺物が出土している。特に埋土下層や床面出土土器から、時期は古墳時代前期前半と判断される。なお、東壁外1mに3つのピットが南北に並んで検出された。住居跡に伴う柱穴と考えられる。

出土遺物（第10図、図版8） 3・5・6は壺。3は胴部の破片で、内外面にハケメを残し、特に内面には粘土継ぎ目の跡が明瞭に確認できる。焼成は良好で、胎土は砂粒を少し含む。色調は内面暗黄褐色、外面褐色である。5は小型丸底壺の胴部。広口で、外上方に直線的に伸びる口縁部が想定される。復元径9.0cm、残存高6.0cm。胴部はやや扁平で、底部はやや尖り気味の丸底となる。器壁はやや厚い。内面と頸基部の外面にナデが残るが、外面のほとんどは摩滅して調整不明である。焼成は良好で、胎土は精良、色調は灰黄褐色～褐色となる。6は小型の広口壺の口縁部～胴部上半。丸底の底部を持つと思われる。口縁部は基部から短く直線的に伸びる。肩部は肥厚して作られ、なで肩状となるなど特徴的である。調整は全体的に摩滅するが、外面の口縁基部にナデ、胴部内面にケズリ痕が残る。焼成は良好で、胎土は砂粒を少し含む。色調は灰黄褐色を呈する。

4は甌。中型の山陰系二重口縁甌の口縁部。口径は14cmに復元され、残存高6.6cmを測る。口縁基部に屈曲を持ち、口縁部は直線的に外上方に伸びる。調整は全体的に摩滅するが、胴部内面にケズリ痕が残る。焼成は良好で、胎土に砂粒を少し含む。内外面とも灰黄褐色である。



第10図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

7～9は鉢。7は小型丸底壺に近い畿内系の鉢。完形に近く、口縁部1/2のみ欠損する。口径12.1cm、器高7.5cm。口縁部は体部と同等に発達するもので、直線的に外上方に伸び、わずかに内湾する。器壁はやや厚めだが、内外面にミガキが施された精製品である。体部上半の一部に黒斑が見られる。焼成は良好で、胎土に砂粒を少し含む。色調は灰黄褐色。8も畿内系の小型丸底鉢。口縁部1/6程の破片で、復元口径は13cm、残存高は6.7cmを測る。口縁部は短く外反して、外上方に立ち上がる。体部は球形に近い。底部は丸底と思われる。器壁は全体的に薄く、体部外面にケズリ痕を残す。体部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで仕上がる。焼成は良好で、胎土は砂粒を少し含む。色調は外面暗褐色、内面灰～暗灰色。9は丸碗のような外形となる浅鉢で在地系と考えられる。体部1/4、口縁部1/8程の破片で、復元口径は12.0cm、器高は5.2cm。底部から体部は丸く緩やかに立ち上がり、口縁部はごく短くわずかに外反する。底部から体部内外面の高い位置までケズリ調整がみられる。焼成は良好で、胎土に砂粒を少し含む。全体的に明褐色を呈する。

10・11は高杯の坏底部で、いずれも口縁部を欠くが、杯上半部から口縁部が直線的に外に聞く畿内系のタイプと考えられる。10は坏部上半が残り、下半との境に稜を作る。全体的に摩滅して、調整は不明である。焼成は良好で、胎土に砂粒をやや多く含む。色調は灰褐色～暗褐色。11は坏部下半のみ残存する。上半との境が屈曲し、口縁部は外に聞くものと思われる。内面にナデが残るが外面は摩滅する。脚部接合部と坏部上半接合部に擬口縁が露出する。焼成は良好で、胎土は砂粒をやや多く含む。色調は内面灰黄褐色、外面黄褐色。

12は磨り石。一部を欠損するが扁平な円形で、長さ10.35cm、幅10.6cm、厚さ6.3cm、重さ87gを測る。側面の2ヶ所に使用痕を残す。凝灰岩製で、角閃石を含む。表面の風化が激しく、小孔が多く見られる。

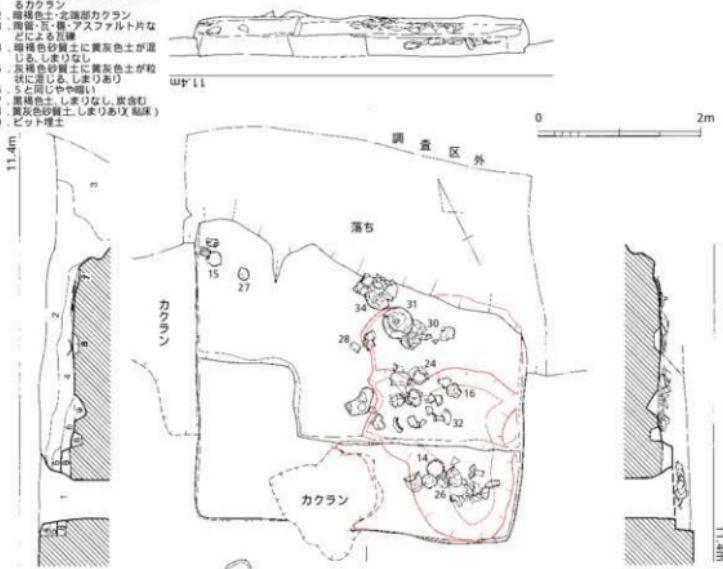
なお、3・7は床面から、8・10・11は埋土下層から出土した。他は埋土上層からの出土である。

3号竪穴住居跡（第11図、図版2・3）

1区北端部で検出した。調査区北側の水路に向かう落ちに切られ、北側1/2～1/3が削り落とされる。軸は北東～南西で、南北の残存長3.7m、東西長は4.1mの方形プランである。「L」字型のベッド状遺構をもち、南西壁から北西壁の南半部に接して1.0～1.2mの幅で、高さ13～20cm設けられている。ベッド上面と床面は概ね平坦で、床面までの深さは約40cm。床面の中央部からはピット1基を検出した。その位置から主柱穴と考えられるが、平面形は不整形で深さは14cmである。これと対になる柱穴が、北側の落ちで失われた部分に想定され、2本柱になるとを考えられる。炉跡などは明確に確認できなかったが、土層観察では残存する床面の北端部に炭を含む黒褐色土（7層）が認められ、この付近に炉が設けられていた可能性が高い。床下の掘り込みは不整形で、南東部に集中する。遺構埋土は大きく上層（2層）と下層（4～7層）に分かれ、上層は下層を切って、後述する1区北端部の落ちの埋土につながる。このため比較的新しい時期の堆積といえる。一方埋土下層は、南側から土が流れた（投げられた）ような堆積状況で、床面からを含め、多くの土器が出土した。器種は壺・甕・瓶・鉢・高杯。時期は弥生時代終末期～古墳時代前期前半のものであり、住居の廃絶直後に廃棄されたものと考えられる。

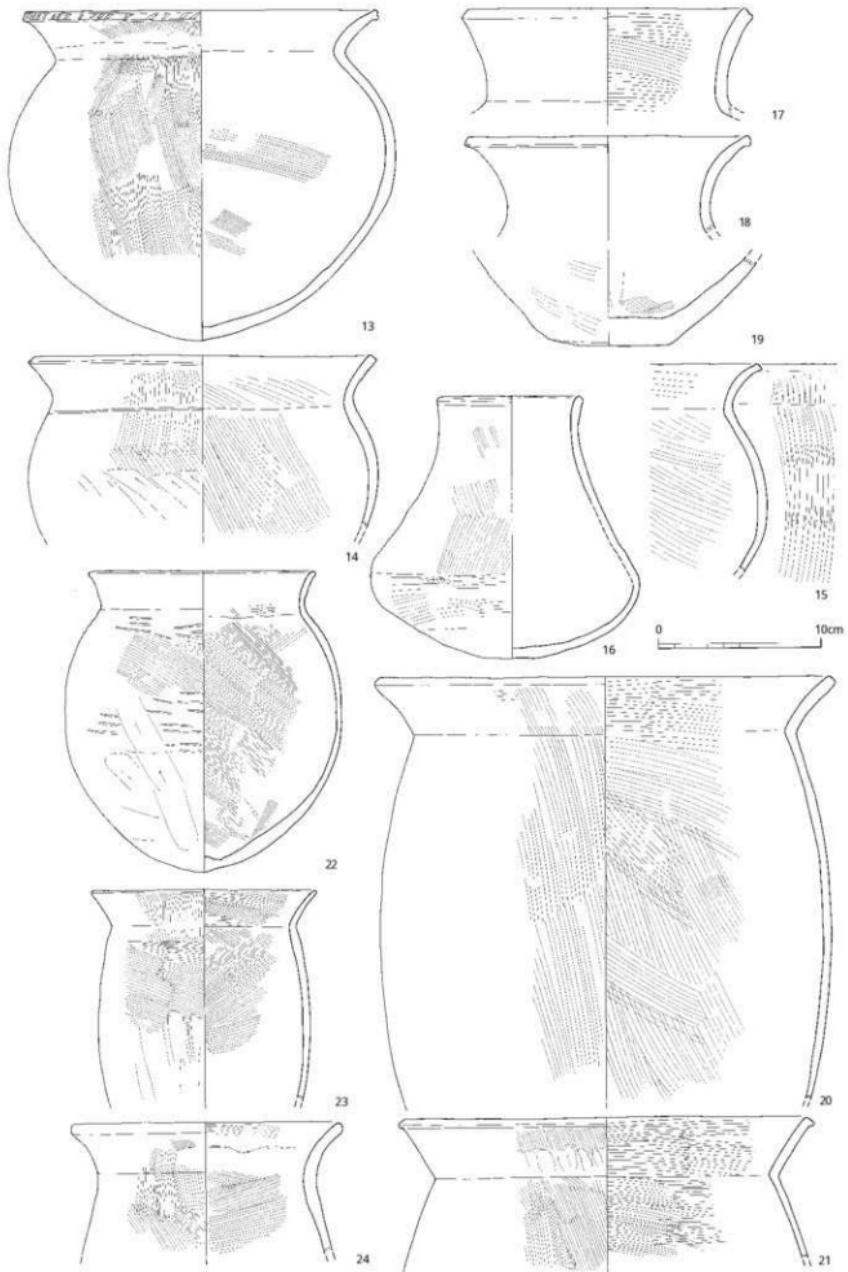
出土遺物（第12～14図、図版9～11） 13～19は壺。13は在地系広口壺の完形品で、口径21.3cm、

1. 灰褐色土と黄灰色土ブロックが混じる埴縁基盤によるカクラン
2. 黒褐色土・北端部カクラン
3. 開口部・瓦器・アスファルト片などに由来する
4. -の間に褐色土と黄灰色土が混じる。しまりなし
5. 灰褐色砂質土に黄灰色土が粒状に混じる。しまりあり
6. 黑褐色土・しまりなし
7. 黑褐色土・しまりなし、成合む
8. 黄灰色砂質土・しまりあり(X 補床)
9. ピット埋土



第11図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

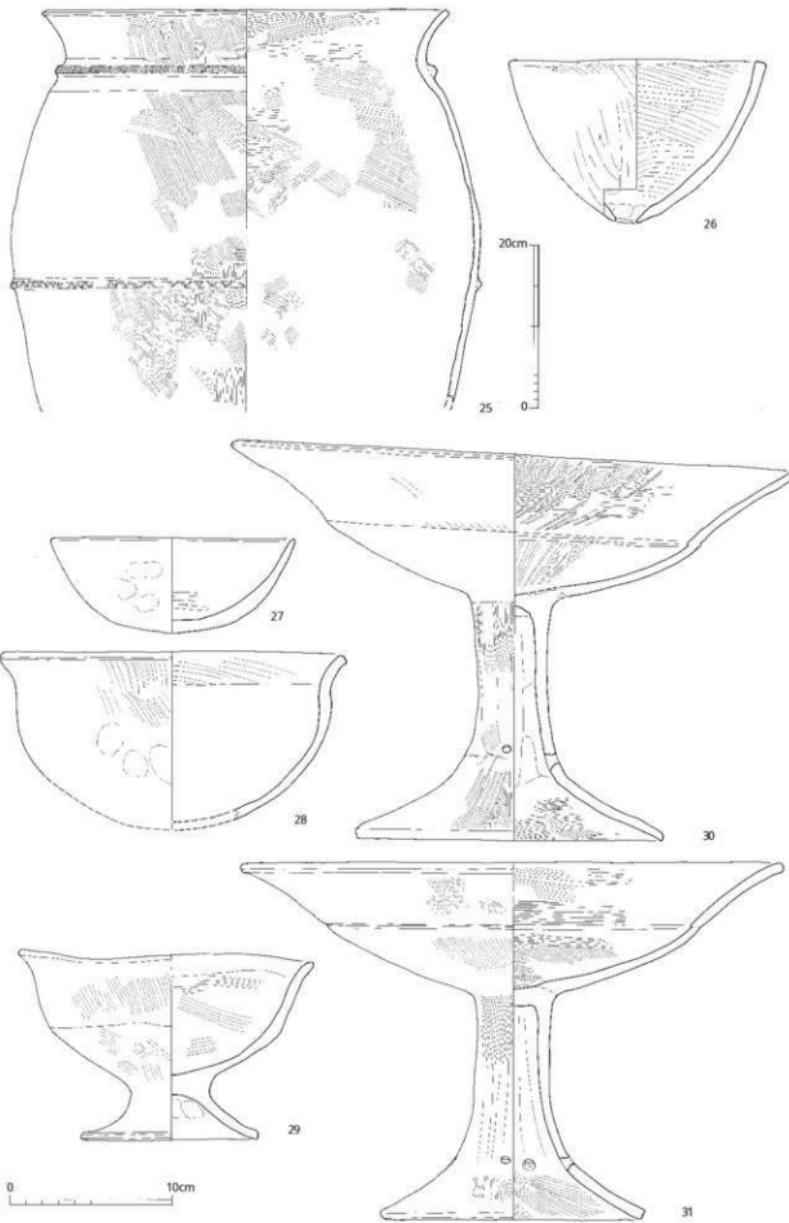
胴径23.8cm、器高20.2cmを測る。頸基部は太く、口縁部は短く外反する。端部は外方に面を作り、凹線状にくぼむ。端部には連続した浅い刻目が廻る。胴部は丸く緩やかな曲線となり、底部は尖り気味の丸底である。胴部は内面横、外面縦のハケメが残る。口縁部は内面ヨコナデ、外面ハケ後ヨコナデ。胴部外面の一部と口縁部内面の一部に黒斑がみられる。焼成は良好で、胎土に砂粒を多く含む。色調は橙色・明褐色。14は在地系広口壺の胴部上半から口縁部の破片で、復元口径21.5cm、残存高11.0cm。13よりも口縁部の外傾は弱く、「く」の字形の口縁となる。端部は外上方に面を作る。器壁は薄く、調整も丁寧に施される。内面は斜め方向のハケメ、外面の胴部上位から口縁部はタテハケ、外面胴部中位以下はケズリで整えられる。頸基部やや下に細い沈線が1条廻る。胴部外面の一部に黒斑がみられる。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色。15も在地系広口壺の胴部上半から口縁部の破片。残存高は12.7cmである。口縁部は短く外反し、端部は丸く收まる。器壁は薄く作られる。調整は粗いハケメで仕上がり、胴部内面斜め方向、口縁部内面は横方向、外面は縦方向に施される。口縁部の外面のみハケメ後のヨコナデがみられる。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色。16は胴部下位に最大径を持ち、緩やかにすぼまりながら口縁に至る形状を持つ壺で、完形品である。口径8.3cm、胴径17.6cm、器高16.1cm。底部は丸底で、胴部は扁平である。胴部と口縁部の境は明瞭でなく、口縁部はわずかに外反しながら上に伸び、端部は丸く作られる。外面の端部下は凹線文状となる。内面はナデ、外面は口縁部ハケメ後ナデ、胴部中位ハケメ、胴部下位から底部はヨコハケで仕上がる。胴部外面の一部に黒斑が認められる。焼成は良好で、胎土に砂粒をやや多く含む。色調は内外面黄褐色である。



第12図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)

佐賀県佐賀市の琵琶原遺跡で16に類するような形状の壺が出土しているが、頸部の長さや底部の調整を異にし、時期は弥生時代後期後半とされている。あるいは瀬戸内地域の弥生終末～古墳前期に、これに脚が付く形状の土器が見られるようだが、いずれにしてもその系譜は不明である。心当たりある方はご教示願いたい。17は在地系広口壺の口縁部。復元口径は18.0cm、残存高は6.0cm。口縁部はやや長く外反し、端部は外上方に面を作る。外面は摩滅するが、内面は横方向のハケメで整えられる。焼成は良好で、胎土は砂粒をやや多く含む。色調は黄褐色を呈する。18は広口壺の口縁部。畿内系か。復元口径17.5cm、残存高は6.0cm。口縁部はやや長く、強く外反して大きく外に開く。端部は丸に近いが外方にわずかな面を作る。調整は内外面ヨコナデ。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色。19は凸レンズ状の壺底部。底径7.3cm、残存高5.5cm。胴部の内外面にハケメが残るが、摩滅が激しい。外面の一部に黒斑がみられる。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含み、角閃石・石英・赤褐色粒を含む。色調は橙色。

20～25は甕。20は胴部上半から口縁部が1/2程残存する在地系の甕で、復元口径28.4cm、残存高は26.0cmを測る。「く」の字型の口縁に、長胴の胴部を持つ。口縁端部は面を作る。内外面には目は粗いが密にハケメが施される。胴部内面は斜め方向、口縁部内面は横、外面は一部に横方向だが、概ね縱方向に施される。口縁部外面のみハケメ後にヨコナデが行われる。焼成は良好で、胎土は砂粒を非常に多く含む。色調は内面褐色～黒褐色、外面暗赤褐色～暗褐色である。21も「く」の字型の口縁に長胴型の胴部を持つ在地系の甕で、口縁部の1/6程が残存する。復元口径25.5cm、残存高6.6cmを測る。口縁端部は面を作り、外側が突出する。器壁は薄く作られ、内外面は目が細かい丁寧なハケメで整えられる。内面はヨコハケ、外面はタテハケ。口縁部外面の基部近くはハケメ後にナデがみられる。外面の一部にススが付着する。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含み、石英・角閃石・赤褐色粒を含む。色調は内面褐色～暗褐色、外面は明褐色～褐色。22は布留系の小型の広口甕で、全体の3/4程が残る。口径は13.8cm、胴径17.0cm、器高は18.5cmを測る。口縁基部は太く、くびれは弱い。口縁部は短くやや外反し、端部は丸く收まる。器壁は薄く、球状の胴部を持ち、底部は尖り気味の丸底となる。胴部内面は斜め方向のハケメ、口縁部内面はヨコハケ後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、胴部外面上半はタタキ後斜め方向のハケメ、同下半はタタキ後ケズリで仕上がる。焼成は良好で、胎土は砂粒と角閃石を多く含む。色調は内面灰黄褐色、外面赤褐色～明褐色～黃褐色。23は「く」の字型の口縁部に長胴の胴部を持つ在地系の小型甕である。胴部から口縁部1/3の残存で、復元口径14.0cm、残存高13.0cmである。口縁端部はわずかに面を作る。器壁は薄く、内外面に丁寧なハケメが施される。内面は、口縁部横方向、胴部は斜め方向で、胴部下半はナデである。外面は、口縁部縱方向、胴部上半横方向で、同下半はケズリで整えられる。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。24は在地系甕の口縁部1/4程で、復元口径は16.7cm、残存高8.0cmである。長胴の胴部から口縁部は弱く屈曲し、丸く外反して口縁端部に至る。端部は丸く收まる。くびれ部には極細の沈線が1条廻る。内面は横方向のハケメ、外面は縱方向の丁寧なハケメが施され、口縁部の内外面はさらにヨコナデで仕上がる。口縁部内面に粘土継ぎ目が確認できる、焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含み、角閃石・白色粒を含む。色調は内面灰黄褐色、外面赤褐色～暗褐色。25は頸基部に突帯を持つ在地系の大型の甕で、胴部上半1/2から口縁部1/4が残存する。復元口径は49.0cm、同じく胴径57.8cm、残存高は48.4cmを測る。口縁部は短く、やや外反する。外面の口縁基部下と胴部中位の最大径部やや下に断面台形の突帯が



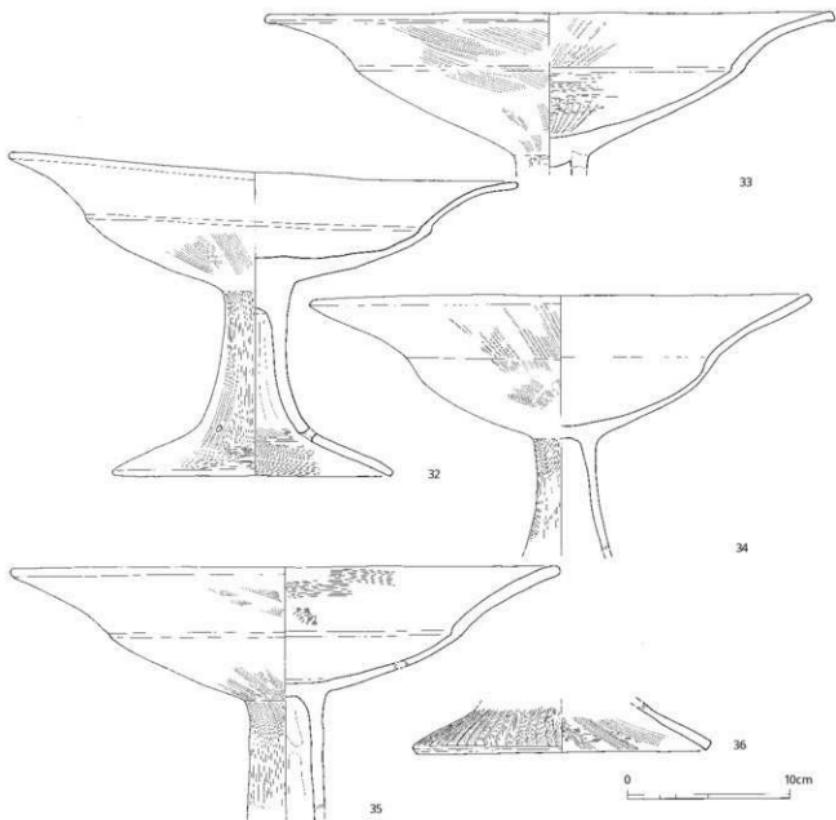
第13図 3号竖穴住居跡出土遺物実測図② (1/3, 25は1/6)

それぞれ1条迴る。基部下の突帯には縦方向の刻み目が、胴部中位の突帯には「V」字の連続する刻み目が施される。調整は内外面とも多方向にハケメが施されるが、概ね口縁部内面はヨコハケ、同外面はタテハケで整えられる。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色を呈する。

26は在地系の有孔鉢の顎。ほぼ完形で、口径15.8cm、器高10.1cm。底部中央の孔は単孔で、孔径は1.5cmを測る。体部の丸みは弱く、シャープな外観である。内面は密なハケメ、外面は下半がケズリ、上半がハケメ後ナデで仕上がる。外面の一部に煤が付着する。焼成は良好で、胎土に角閃石を多く含む。色調は内面灰褐色、外面明褐色～灰褐色。

27～29は鉢。27は在地系の素口縁の浅鉢で、口縁部が一部を残して欠損する。復元口径15.1cm、器高は5.8cm。丸底で、体部は丸く緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。器壁はやや厚い。内面の一部にミガキの跡が残る他は、ナデで仕上がる。焼成は良好、胎土は砂粒を多く含み、角閃石・石英・赤褐色粒を含む。色調は内面黄灰褐色、外面褐色。28は在地系の屈曲する口縁を持つもので、体部から底部1/2が欠損する。口縁は21.5cm、残存高は10.3cm。口縁部の屈曲は弱く、短く外反する。端部は面を作る。口縁部内面斜め方向のハケメ、外面斜めから縦方向のハケメで整えられ、体部内外面はナデで仕上がる。外面の一部に黒斑が残る。焼成はやや不良で、胎土には砂粒をやや多くと、角閃石を含む。色調は黄褐色～暗褐色を呈する。29は28のタイプに低い脚が付くもので、口縁部と脚部の1/3を欠く。口径18.0cm、底径10.9cm、器高11.3cmを測る。鉢部に歪みがみられる。体部外面中位に屈曲が作られ、内湾して口縁部に伸びる。口縁部の屈曲は弱く、やや外反する。端部は丸く收まる。脚部は短く外に開き、端部は外に面を作る。体部内外面はハケメ後ナデ、口縁部は内外面ヨコナデ、脚部はナデで仕上がる。焼成は良好で、胎土に砂粒・角閃石を含む。色調は内外面とも橙色～暗褐色を呈する。

30～36は高坏。30～35はいずれも坏部が屈曲し、口縁部が長く、外反して外に大きく開く在地系のものである。30は完形で、口径34.5cm、底径18.7cm、器高は焼け歪むため22.8～24.6cmを測る。坏部の下半はやや丸みを持って内湾する。外面口縁部境の屈曲は不明瞭である。口縁部は大きく外に開くが、反りは弱く、端部は丸く收まる。脚部はほぼ直立に伸び、裾部はラッパ状に開くが、わずかに内湾している。端部は外に面を作る。脚部の3ヶ所に径0.6cm程の穿孔がある。全体的に摩滅するが坏部内面と脚部外面・脚裾部内面に丁寧なミガキが施されている。その他坏部外面はハケメ後ナデ、脚部内面はナデである。焼成は良好、胎土は精良だが、赤褐色粒を含む。色調は灰黄褐色。31はほぼ完形だが、脚裾部の1/3程を欠く。口径は33.5cm、底径16.3cm、器高は21.9cmを測る。外観は概ね30と似るが、坏部下半よりも口縁部が短く、屈曲部外面の稜は比較的明瞭である。また脚裾部の開きが小さい。脚裾部の穿孔は2ヶ所残るが、本来は4ヶ所あったと考えられる。内外面の全体にハケメが残るが、摩滅気味である。焼成は良好で、胎土に砂粒を多く含む。色調は橙色～赤褐色～淡灰褐色。32は口縁部の1/2、脚裾部の2/3を欠く。復元口径31.5cm、同底径17.4cm、器高は19.8cmを測る。やや焼け歪む。坏部は浅く、屈曲部には明瞭な棱が廻る。口縁部は大きく外反して開き、わずかに内湾して端部は丸く收まる。脚部は柱状部がやや開き、強く外反して裾部へと続く。裾部はやや内湾し、端部にわずかな面を作る。裾部の3ヶ所に穿孔がある。坏部は下半外面にハケメを残す他は摩滅する。脚部は外面に丁寧なミガキとハケメが残り、内面は裾部ヨコハケ、柱状部はナデで整えられる。脚部内外面の3ヶ所に黒斑がみられる。焼成は良



第14図 3号竖穴住居跡出土遺物実測図③ (1/3)

好で、胎土は砂粒を少しと赤褐色粒を含む。色調は内外面黄灰褐色～明褐色。33は壺部1/4程の残存である。復元口径は35.0cm、残存高は10.5cm。壺部下半は直線的だがやや深めで、屈曲部の稜は不明瞭である。口縁部は大きく反って外に開き、端部の外に面を作る。内面ミガキ、外面ハケメで整えられる。脚部接合部に擬口縁が露出する。口縁部外面に黒斑が残る。焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色。34は脚裾部が欠損する。口径31.0cm、残存高15.7cmを測る。壺部下半は深く、丸みをもって内湾する。屈曲部外面の稜は不明瞭である。口縁部はやや外反して開いた後わずかに内湾する。端部は外に面を作る。内外面とも摩滅するが、壺部外面にハケメ後ミガキ、脚部外面にミガキの痕跡が残る。口縁部外面の一部に黒斑が残る。焼成は良好、胎土は精良で、赤褐色粒を含む。色調は橙色～明褐色。35は口縁部1/2と脚裾部を欠く。脚柱状部から壺部が残るが、壺部下半で接合できない箇所があり復元している。復元口径は24.0cm、残存高14.8cmを測る。壺部下半はわずかに内湾し、屈曲部外面の稜は不明瞭である。口縁部は肥厚し、外反

して大きく開く。口縁端部は丸く收まる。全体的に摩滅するが、坏部内外面にハケメ、脚部外面にはミガキの跡が残る。口縁部の一部に黒斑が残る。焼成は良好、胎土は精良で赤褐色粒を含む。色調は内外面淡灰褐色。36は脚部1/2程の破片。復元底径が17.8cm、残存高2.9cm。端部に面を持つ。内面にハケメ、外面にミガキと暗文を施す。焼成は良好で、胎土に赤褐色粒を含む。色調は灰黄褐色～灰褐色を呈する。なお13・14・16・20・22～26・28～34・36は床面、15・17・19・21・27・35は埋土下層、18は埋土上層から出土した。

3 土坑

1号土坑（第16図、図版4）

1区中央やや南の東側調査区で検出した。東端部分が調査区外となるが、平面形は南北1.5m×東西約2.2mの楕円形に復元できる。床面は東側にテラスを持って、西側が深くなる。テラスは深さ27.5cm、西側の床面は35cmを測る。テラスの中央と南端には小ピットがある。埋土は上層に包含層の溜まりが残るが、大半は黑色土の単層である。遺物は出土していない。

2号土坑（第16図、図版4）

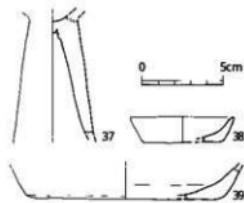
1区中央やや南の東側、1号土坑の北0.5mで検出した。2号溝に切られる。平面形は長軸4.2m×東西2.5mの長方形プランで主軸は北東-南西である。北壁沿いに大小2つのピットがある。床面は2段のテラスを作り、南に向かって下がる。最も深い南端部では深さ50cmを測る。埋土は概ね黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（3層）からなる。なお、西壁沿いの土坑外には1～3列の小ピットが連なるように配されている。埋土は3層と酷似するもので、一連の遺構とも考えられる。出土遺物は次の1点である。

出土遺物（第15図）37は高坏の脚部である。残存高7.2cm。外下方に開きながら直線的に伸びる。内外面とも摩滅するが、内面は一部横方向のケズリが見られる。上面は坏部との擬口縁が露出する。焼成は良好で、胎土に砂粒・雲母・角閃石を含む。色調は灰黄褐色。古墳時代中期に下るものか。

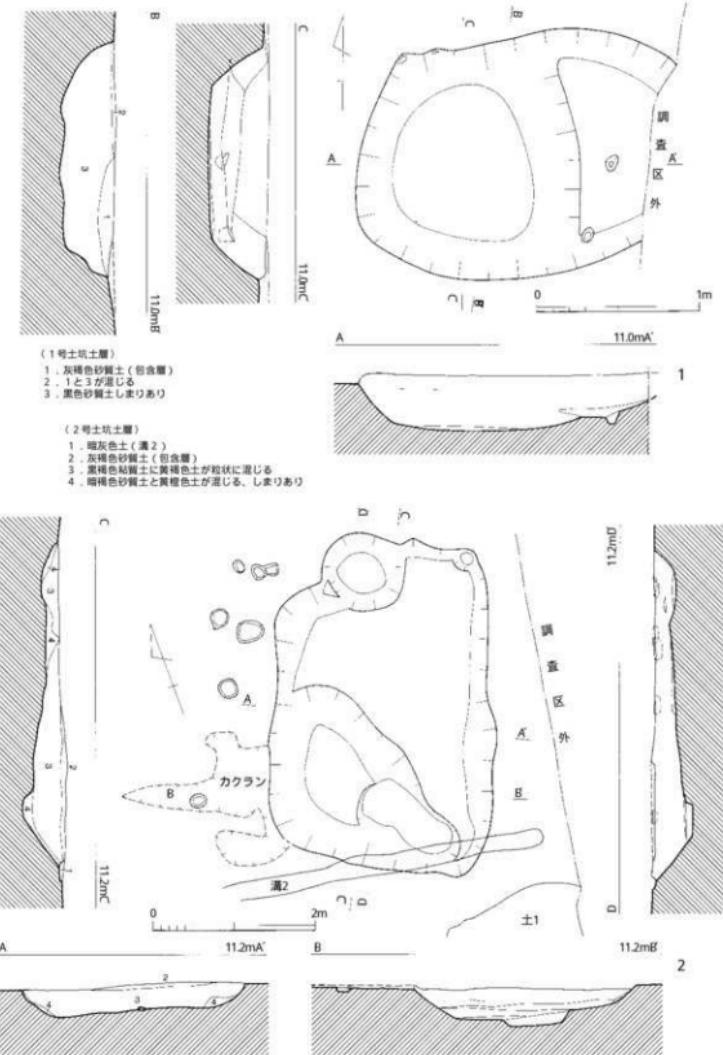
3号土坑（第17図、図版4）

1区中央部のやや西側、1号掘立柱建物跡の西1.2mで検出した。平面形は東西1.4m×南北1.2mの隅丸形プランで、深さは浅い。床面は中央部分が最も下がるが、概ね平坦で、中央部の深さは22cmを測る。北東隅と北西隅の高い位置にテラスがあり、深さはそれぞれ4cmと2～3cmである。埋土は暗灰色土に黄橙色土が混じる土の単層である。遺物は土器の小片が7点出土したが、図化できるものはない。このため時期は不明だが、埋土が3号溝と似ることから、近世以降になる可能性がある。

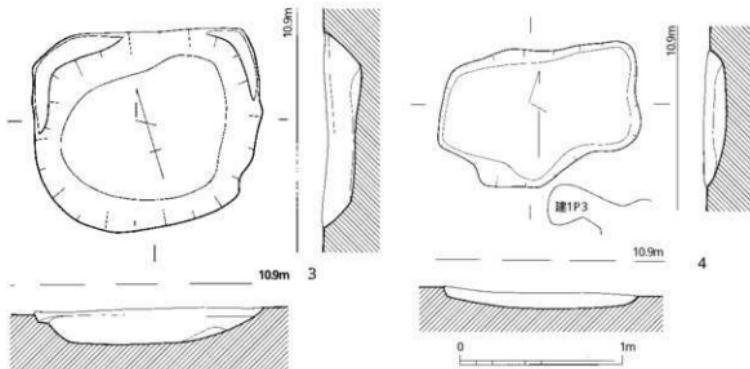
4号土坑（第17図、図版5）



第15図 2・5号土坑出土遺物実測図(1/3)



第16図 1・2号土坑実測図 (1/30、1/60)



第17図 3・4号土坑実測図(1/30)

1区中央部の、1号掘立柱建物跡P 3北西に隣接して検出した。平面プランは東西1.2m×南北0.8mの不整形の土坑である。床面は平坦で、深さは最も深いところで13cmと浅い。埋土は暗灰色土に黄橙色土が混じるもので3号土坑と似る。遺物は、土師器と思われる小片1点を確認したが、図化できるものではない。だがこれも埋土が3号溝と似ることから、近世以降になる可能性がある。

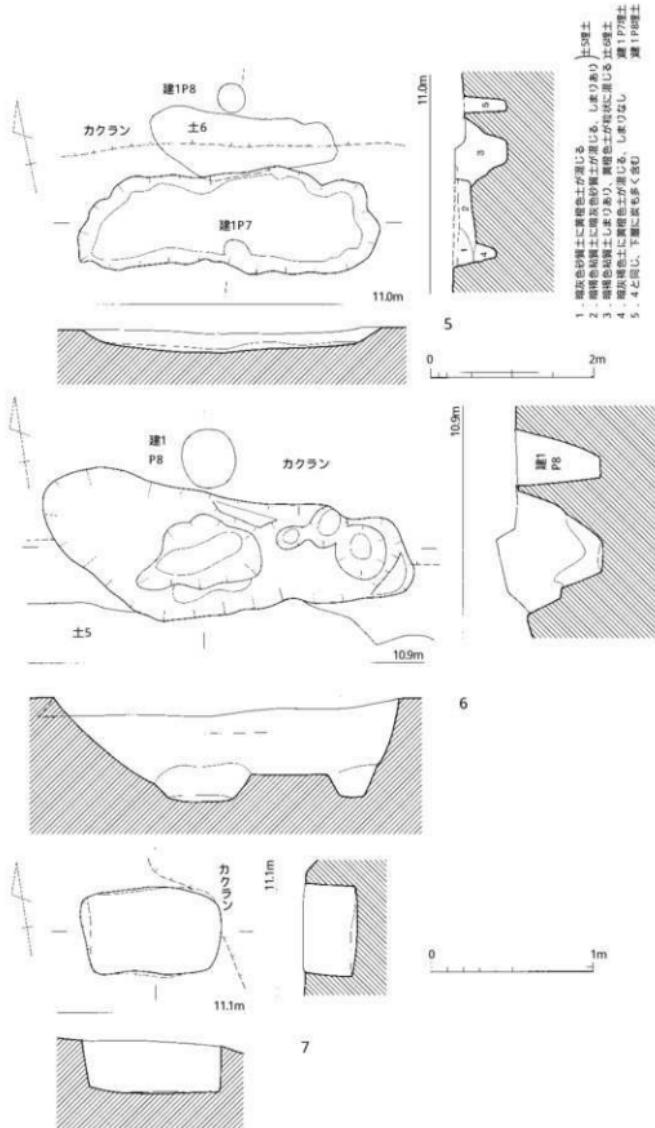
5号土坑（第18図、図版5）

1区中央のやや西で検出した。1号掘立柱建物跡と6号土坑を切る。平面形は東西4.0m×南北13mの不整長形で、床面は概ね平坦である。深さは最も深いところで33.5cmを測る。遺物は土師質土器と考えられる小片が多数出土したが、図化できたのは次の2点である。出土遺物より13～14世紀には埋没したものと思われる。

出土遺物（第15図）38・39は土師質土器の小皿と壺の底部である。38は口径6.4cm、底径4.6cmに復元され、器高は1.6cmを測る。全体的に摩滅して調整は不明瞭である。13～14世紀か。焼成は不良で、胎土に砂粒を少し含む。色調は褐灰色白色。39は復元底径12.0cm、残存高は2.0cm。口径は15cm前後に復元できよう。内面は底部と体部の境が明瞭でない。全体的に摩滅して調整は不明瞭である。焼成は不良で、胎土は精良、色調は淡灰褐色を呈する。12～13世紀か。

6号土坑（第18図、図版5）

1区中央のやや西で検出した。南側が5号土坑、北半分が攪乱の東西溝に切られる。平面形は東西2.3m×南北0.8mの不整長形である。床面は凹凸が激しく、東側と中央やや西の2カ所に深さのピークがある。東側は3つのビットが連なるような床面で、最も深い箇所で63cm、中央やや西はさらに不整形の掘り込みがされて、深さ66cmを測る。埋土は綿まりがある黄橙色土粒を含む暗褐色土で、遺物は出土していない。埋土が2号土坑と似ることから、それに近い時期とも考えられる。



第18図 5・6・7号土坑実測図 (1/30、土5は1/60)

7号土坑（第18図、図版6）

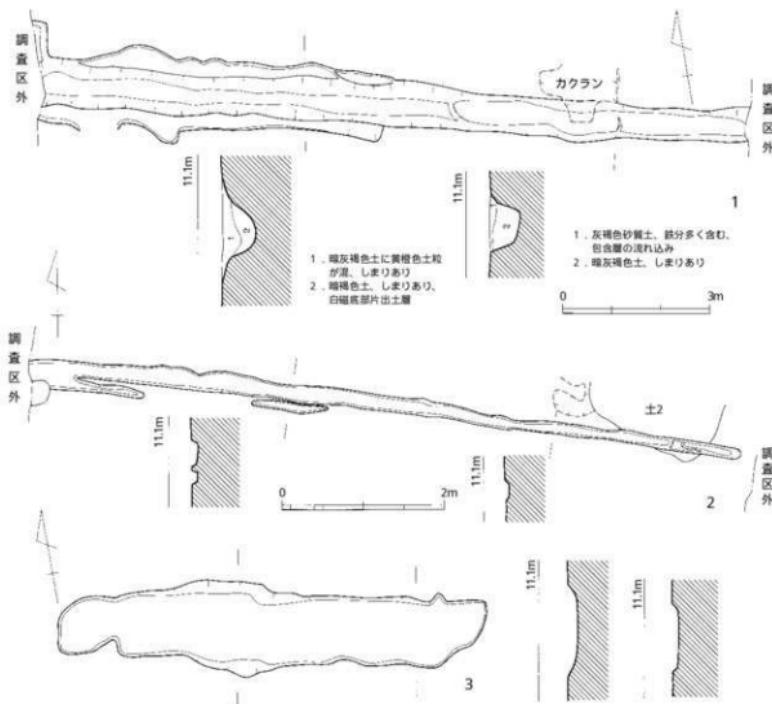
1区北部の中央、2号竪穴住居跡の西1mで検出した。南端部がわずかに北部擾乱で切られるが、平面プランは南北0.9m×東西0.5mの長方形である。壁面は直立し、一部はオーバーハングする。

床面は平坦で、深さは33cmを測る。埋土はよく締まった黒褐色土単層からなる。2号竪穴住居跡に近接し、埋土も似ることから、関係する遺構とも考えられるが、遺物は出土していない。

4 溝・小溝

1号溝（第19図、図版6）

1区中央やや南で検出した東西溝である。調査区を横断し、東西とも調査区外に延びる。検出した長さは約14.6m。東から西に向かって広がりながら延びてあり、東側の調査区で幅0.7m、深さ45cm、中央部で幅1.3m、深さ44cm、西側調査区で幅2.0m、深さ42cmを測る。遺物はほとんど



第19図 1・2・3号溝実測図 (1/100、溝3と断面図は1/60)

どが土師質土器と思われる土器小片で、その他に龍泉系の青磁の小片が1片、および以下に報告するものが出土した。出土遺物より16世紀に埋没したと考えられる。

出土遺物（第22図、図版11）40は白磁の小型高台付皿底部。底径2.6cm、残存高1.4cmを測る。高台には挟り込みを持たない。高台内は斜めに削り出されて、高台内中央部には兜巾のような突起が残る。残存部分の外面は無釉である。内面は施釉されて灰白色を呈し、貫入がみられる。焼成は良好、胎土は精良で黄灰白色を呈する。内面見込みに目跡を残す。明代の15世紀に属する。

41は土師質土器の鍋。口縁部の破片である。素口縁のもので、外上方に直線的に伸び、端部に面を作る。内面ヨコハケ後ナデ、外面ナデ。焼成は良好で、胎土は砂粒をやや多く含む。色調は内面明褐色、外面は明褐色～暗褐色。15世紀頃か。42は瓦質土器の火鉢。口縁部の破片である。外面の口縁部下に断面三角形の突帯が2条回り、その間に二直違文が連続して印刻される。内面はハケメで仕上がる。焼成はやや不良で、胎土に砂粒を含む。色調は灰色である。16世紀頃か。

2号溝（第19図、図版6）

1区やや南で検出した東西溝である。1号溝の北5.6m、1号土坑の北0.5mに位置し、2号土坑を切って、1号溝と並行するように走る。西側は調査区外に延びるが、東側は調査区境近くで終わり、検出した長さは14.4mを測る。細長く浅い溝で、幅は概ね30cm、深さは5cmである。土層は2号土坑の断面図（第16図）に併せて図示している。2号溝の位置はちょうど筆境にあたり、これに関係する遺構の可能性が高い。遺物は、土師質土器の小皿小片など5点を得たが、図化できるものは次の瓦質土器1点である。

出土遺物（第22図）43は瓦質土器の鉢底部。底径14.8cm、残存高は3.5cm。平底で、体部は外上方に伸びる。体部内面はヨコハケ後ナデ、外面はナデ。底部は内面ナデ。外面はナデだが一部にカキメのような痕跡が残り、脚を接合した可能性がある。焼成は不良で、胎土に砂粒を少し含む。色調は内面明灰褐色、外面暗灰褐色。時期は特定できないが、中世後期の幅に収まる。

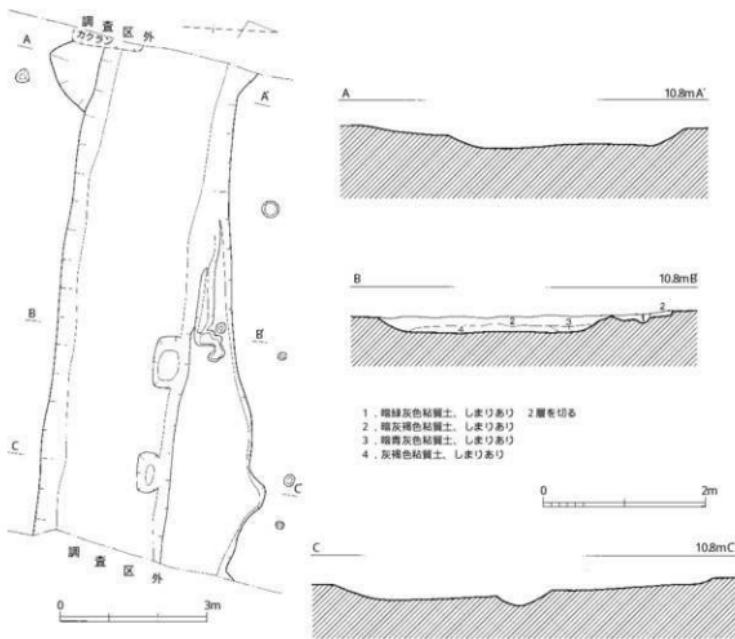
3号溝（第19図、図版7）

1区中央部で検出した。1号据立柱建物跡の南1.6mに位置する。東西方向の深い溝で、検出した長さは5.3m、中央部の幅は1.2m、深さ12cmを測る。埋土は暗灰色土に黄橙色土が混じる。遺物は18世紀以降の肥前系磁器を含む小片5点が出土したが、図化できるものはない。

6号溝（第20図、図版7）

2区北部で検出した東西溝。東西とも調査区外に延びるが、調査区西境の南側が攪乱（倉庫基礎）で失われる。検出した長さは10.3m。東から西へ幅が狭まりながら伸びている。調査区東境では幅42cm、同じく西境では3.2mを測る。北岸の中央やや西から調査区東境にかけてテラスがあり、調査区外にも続いている。中央部のテラス上には溝埋土を掘り込む不整形の攪乱がある。またテラス下の底面には長方形のピット2基が確認された。テラスの深さは調査区東境で13cm、溝中央部で12cm、底面の深さは調査区東境で33cm、溝中央部で29cm、調査区西境で36cmを測る。出土遺物から16世紀後半～17世紀前半に埋没したと考えられる。

出土遺物（第22図、図版11）44は陶器の丸碗。口縁部は欠損し、底径4.6cm、残存高4.7cmを測る。



第20図 6号溝実測図 (1/100、断面図は1/60)

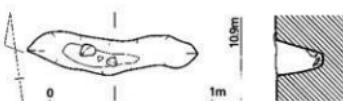
高台内は削り出されて中央部に兜巾が残る。体部下半から底部の外面は無釉で、その他には黒釉が施される。釉調は黒褐色～黒色で、焼成は良好、胎土は精良で灰色を呈する。唐津系の製品で、時期は16世紀後半～17世紀前半と考えられる。

45は土師質土器の鍋口縁部破片。素口縁で、端部はわずかに面を作る。調整は内面ヨコハケ、外面は摩滅して不明である。焼成は不良で、胎土に砂粒をやや多く含む。色調は灰白色となる。46は瓦質土器の鍋口縁部破片。端部に面を作る。内面ヨコハケ、外面はナデで仕上がる。焼成はやや不良で、胎土に砂粒を多く含む。色調は灰色。

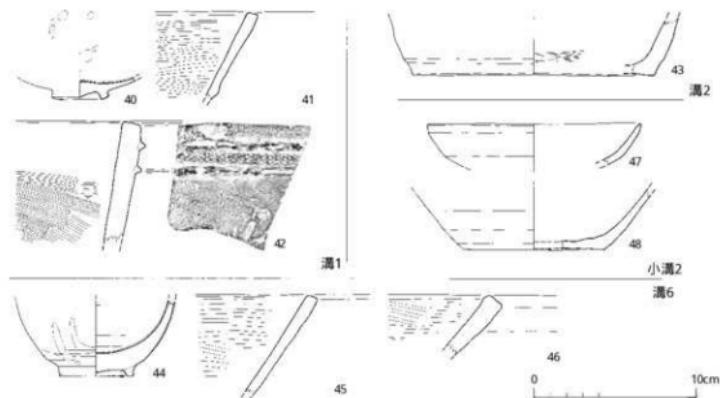
2号小溝 (第21図、図版7)

1区南部の中央で検出した、長さ1.1m、幅22cmの小溝状の遺構である。深さは29cmと、プラン・規模の割に深く、床面は平坦である。床面からは土師質土器環が出土している。埋土は暗褐色粘質土の単層。

当初は削られた竪穴住居跡の壁溝の残りかと思われたが、どのような性格の遺構か判断に迷う。埋納遺構とも考えられようか。遺物は土師質土器の环・小皿、黑色土器を中心に土器の小片



第21図 2号小溝実測図 (1/30)



第22図 1・2・6号溝・2号小溝出土遺物実測図(1/3)

が多数出土した。図化できるのは以下の2点であるが、15世紀に属する朝鮮産雜釉陶器も小片1点ながら出土している。

出土遺物(第22図) 47・48は土師質土器の坏。47は口縁部破片で、復元口径13.1cm、残存高2.6cm。やや内湾し、中位の屈曲が残る。内外面ヨコナデで、外面下端部にわずかだがケズリ痕が確認できる。焼成は良好で、胎土は精良、明褐色を呈する。11～12世紀前半。48は底部から体部の破片で最下層から出土した。底径は8.8cm、残存高は3.9cmを測る。口径は15cm以上となる。底部は平らで、体部は直線的に外上方に伸びる。体部内面ヨコナデ、底部内面は不定方向のナデ。外面は体部上位はヨコナデ、同下位は回転ヘラケズリで仕上がる。底部外面にはヘラ切り痕が残る。焼成は良好で、胎土に砂粒をやや多く含む。色調は淡赤褐色。12世紀頃のものか。

5 その他の出土遺物

1区北拡張部出土遺物(第23～25図、図版11・12)

1区北側の調査区外には現在、東西に用水路が走るが、調査区北端部ではこの水路に向かって落ちるように遺構面と3号竪穴住居跡が切られ、埋土には大量の瓦礫が近代の遺物とともに埋められていた。水路の護岸の裏込に埋められたものと思われる。3号住居跡を検出する際、この中に多くの素焼きの土器・土製品や、窯業で使用される道具類が確認されたため、一部状態の良いものを持ち帰った。恐らく近隣の野町焼の製品と思われる。今回その他の出土遺物として報告する。

49～53は磁器皿。いずれも近代以降の製品である。49はコバルトとクロムによる染付。口径11.2

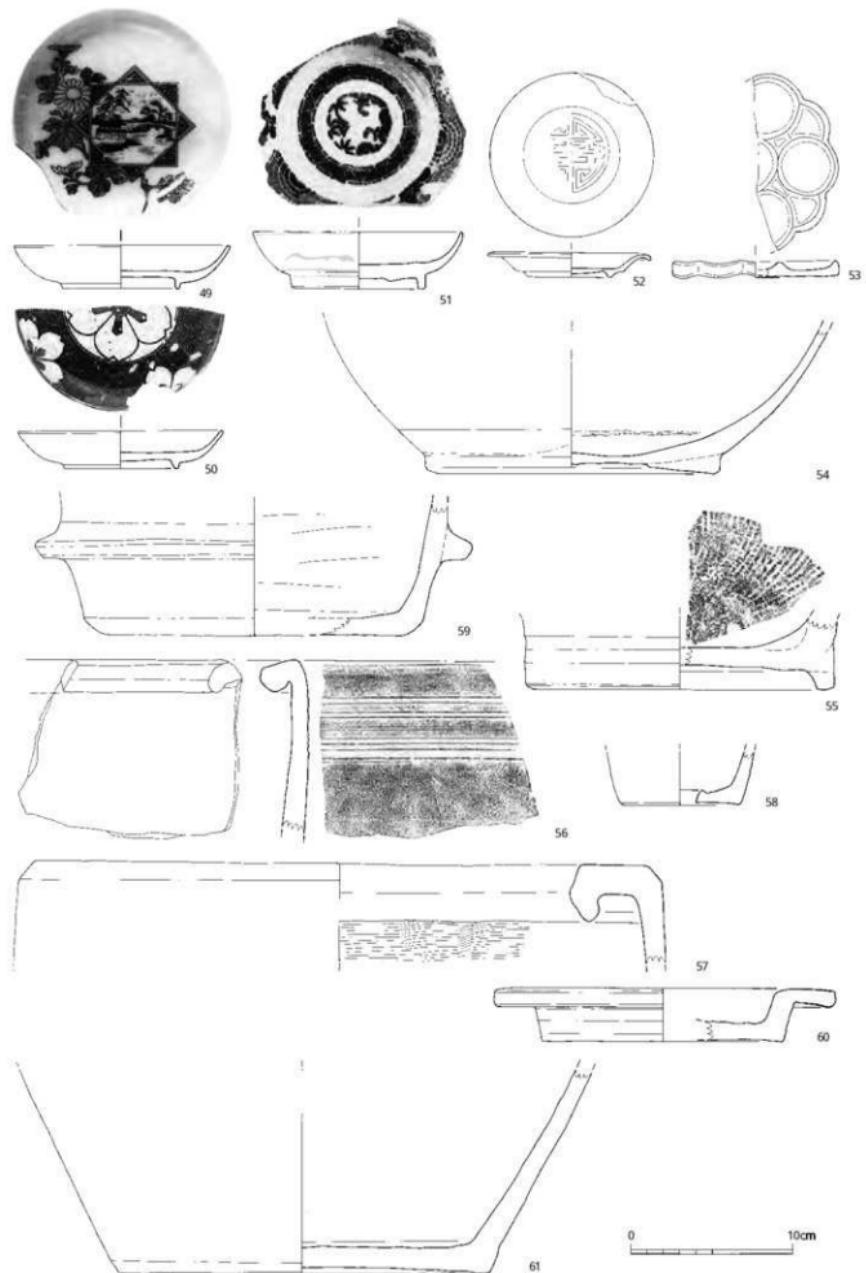


北拡張部埋土の状況

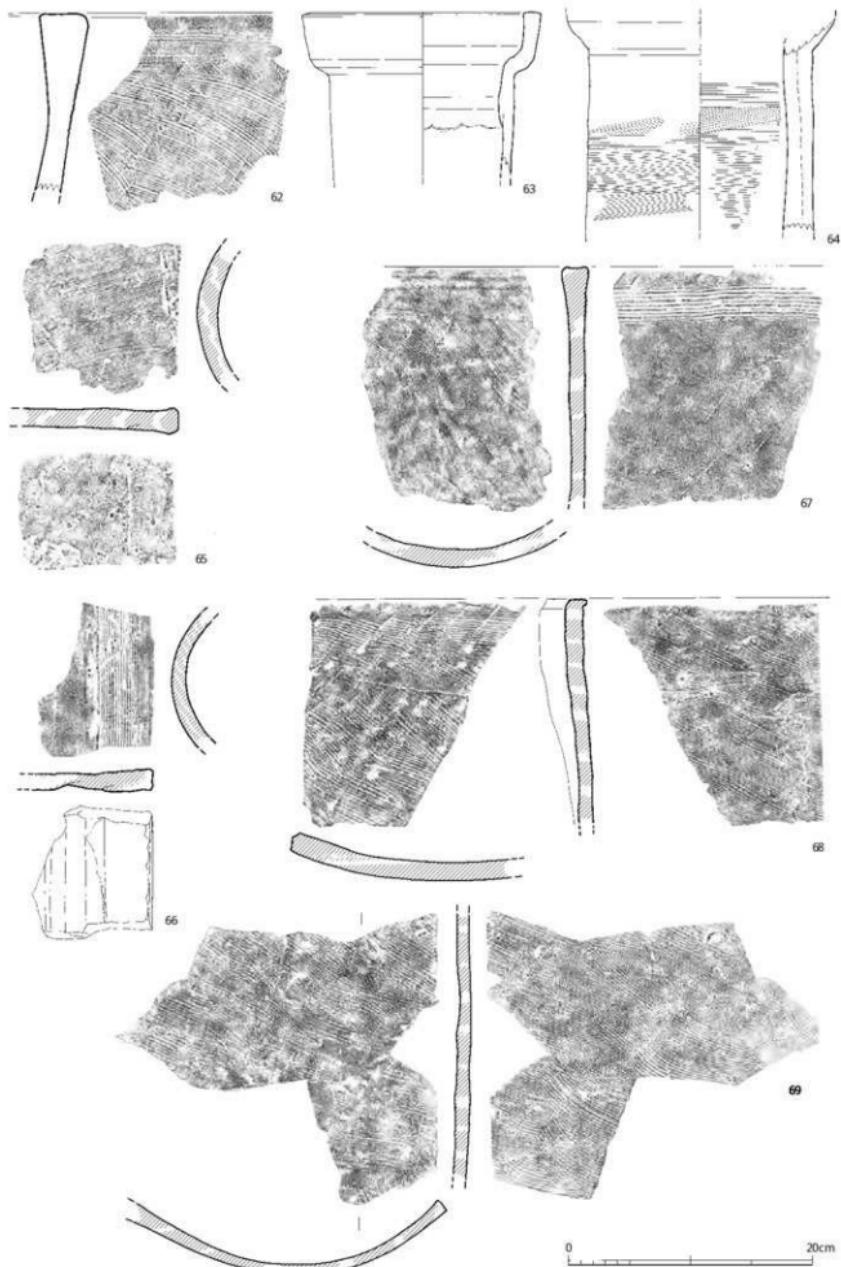
cm、底径7.2cm、器高2.6cm。50はコバルト染付で、口縁端部は鉄で口紅される。疊付は釉ハギ。口径12.6cm、底径7.0cm、器高2.3cm。51もコバルト染付。蛇の目凹型高台で、見込みは蛇の目釉剥ぎする。復元口径10.8cm、底径8.2cm、器高3.5cm。52は白磁で、口径10.0cm、底径5.1cm、器高2.3cm。口縁部は強く外反し、疊付は釉剥ぎ。見込みに「寿」の隸書体文字が陰刻される。53は磁器製のパレット(絵の具皿)。梅皿とよばれる花の形で、1/2を欠損する。中央1ヶ所、周囲5ヶ所に円形の色溶きスペースが配されると考えられる。

54は陶器の鉢底部。底径18.2cm、残存高8.8cm。高台内を円形に削り込んで、高台を作り出す。内面に輪状の目跡を残す。焼成は良く、釉調は灰黄褐色。施釉範囲は露胎の底部外面を除く部分である。55は陶器のすり鉢底部。復元底径18.0cm、残存高4.4cm。高台は脇が削られて直立する。摩滅が進み、内面のカキメも不明瞭である。釉調は褐色で、疊付を除く前面に施釉する。

56~64は素焼きの土器。野町焼と考えられる製品である。56・57は火鉢の口縁部。56は横13.4cm、残存高10.9cmの破片。口縁部が内側に鈎状に折り曲がる。外面口縁部下にカキメ状の沈線が6条廻る。沈線より下はヨコナデ、沈線より上から内面は工具によるヨコナデで仕上がる。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。色調は淡褐色。57は復元口径37.6cm、残存高5.9cm。56よりも大きなタイプと考えられ、口縁部が「7」字状に内側に折り曲げられる。体部内面ヨコハケ、他はナデで整えられる。焼成は良好で、胎土に砂粒を少し含む。色調は明褐色~褐色。58は植木鉢の底部。復元底径は7.6cmと小型のもので、残存高は3.3cm。底部中央に径約1.5cmの孔が空く。底部外面に糸切り痕が残り、他はヨコナデ。焼成は良好、胎土は精良で、橙色~明褐色を呈する。59はいもがま。厚手の浅い鉢状の器で、体部外面の周囲に羽釜の鉗のような把手が廻る。この中に焼けた小石と芋を入れて石焼き芋を作ったそうである。復元底径18.1cm、残存高は8.1cm。底部外面ナデ、他は工具によるナデで整えられる。焼成は良好で、胎土に赤褐色粒を含む。色調は橙色~明褐色。60は火消し壺の蓋。全体的な断面形は逆「凸」字型で、中央部は欠損するが、つまみが付くと思われる。下に突出する天井部の径は14.6cm、身受けとなる部分の最大径は20.7cm、器高は3.1cmを測る。口縁端部から身受け部~天井部の外面(上面)はヨコナデ、身受け部の内面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデで仕上がる。焼成は良好で、胎土に雲母・赤褐色粒を含む。色調は明褐色。61は甕の底部。底径22.8cm、残存高12.5cm。底部外面は未調整だが、他はヨコナデ。焼成は良好で、胎土に雲母を含む。色調は明褐色。62は大型の甕の口縁部。径は復元できないが、残存高は14.5cm。やや内湾して立ち上がり、端部は肥厚して上方に面を作る。調整は外面斜め方向の単位の短い八ヶメ、外面の端部近くはヨコハケ、端部上面から内面はヨコナデ。焼成は良好で、胎土は砂粒を少し含む。瓦質のような質感に焼かれ、色調は内面灰色~黒灰色、外面灰色を呈する。63・64は土管。63は口縁部が残り、復元口径19.6cm、胴径は14.4~15.1cm、残存高13.7cmを測る。調整は全面回転ナデ。内面の屈曲部やや下に粘土継ぎ目がみられる。焼成は良好で、胎土は精良、色調は黄褐色を呈する。64は口縁端部を欠く。胴径は18.2~18.7cmに復元でき64よりもひと周り大きい。残存高は17.7cm。調整は内外面ヨコハケで、屈曲部付近は回転ナデ。焼成はやや不良で、胎土に砂粒を少し含む。表面は煙されたようで、内面黒灰色~暗褐色、外面黒灰色となる。なお、割れ口も一部焼された跡がみられ、二次焼成を受けたと考えられる。なお、野町焼では、土管を半分に割って丸瓦を作ったそうで、どちらも残存が1/2に満たないため、丸瓦になる可能性がある。逆に後述の65・66は丸瓦として報告するが、土管の破片とも言える。



第23図 その他の出土遺物① (1/3)



第24図 その他の出土遺物② (1/4)

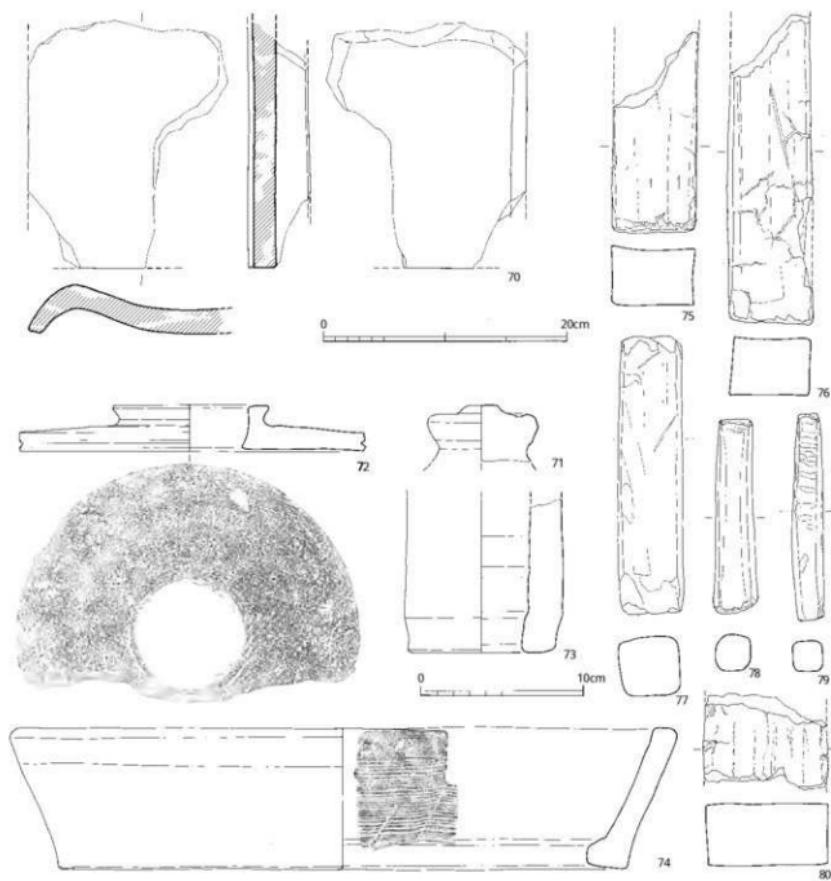
65~70は瓦。これらも素焼きで、野町焼の窯で焼かれたものと考えられる。65・66は丸瓦の狭端部。65は残存長12.3cm、同幅11.4cm。凸面タテハケ、凹面は端部近くはヨコナデ、他はナデで仕上がる。焼成は良好、胎土に砂粒を少し含む。色調は橙色。66は残存長9.9cm、同幅11.1cm。凹凸面ヨコナデで、凸面の端部近くにはカキメが施される。焼成はやや不良。胎土に砂粒を少し含み、淡灰褐色を呈する。67~69は平瓦。67は一方の端部が残り、残存長19.4cm、同幅15.2cm。凹面は端部近くがハケメ・ヨコナデ、他はナデ、凸面はナデと端部近くはカキメ、他はナデで整えられる。焼成はやや不良、胎土は精良である。色調は暗褐色。68は狭端部と側面が残る。残存調18.4cm、同幅18.1cm。凹凸面ハケメ、端部と側面はヘラ切り後未調整。焼成良好、胎土は砂粒を少し含み、色調は凹面橙色、凸面暗褐色である。69は一方の側面が残り、残存長21.7cm、同幅25.5cm。凹凸面ハケメで、凹面の中央部は後ナデされる。側面はヘラ切り後未調整。焼成良好で、胎土は砂粒を少し含む。色調は赤褐色~褐色。70は棧瓦。棧側の側面と一方の端部が残る。残存長20.2cm、同幅16.4cmを測る。内外面ナデである。焼成はやや不良。胎土は精良で、赤褐色粒を含む。色調は灰色~褐色~橙色を呈する。67~70は割れ口に二次焼成痕がみられる。

71~74は用途が不明な土製品。窯道具の可能性も考えられる。71は蓋のつまみ。サヤの蓋であろうか。最大径5.7cm、残存高3.5cmと大型である。調整はヨコナデ。側面の2カ所に煤が付く。焼成は良好。胎土に砂粒を多く含み、雲母を含む。褐色を呈する。72は蓋状の製品。平らな円盤の中央に径8.5cmの孔があり、孔の円周上面につまみ状の突起が付く。全体の径28.2cm、器高3.8cm、つまみ部の径12.8cmを測る。円盤部の側面には深い沈線が1条廻る。上面と孔の側面はヨコナデ、下面是ハケメで仕上がる。焼成はやや不良で、胎土に砂粒を少し含む。色調は上面黄褐色、下面灰白色。73は筒状の製品でチャツの一種か。底径7.0cm、胴径9.4~9.6cm。器高9.4cm。調整は内外面回転ナデ、端部はナデ。焼成は良好で、胎土に砂粒を多く含む。色調は橙色を呈する。74は大型で底部に大きな孔が空く浅鉢状の土製品。孔というよりも底部が無いとすべきか。復元口径54.5cm、底径46.5cm、器高11.6cm。調整は体部内面のみヨコハケで、他はヨコナデ。焼成良好で、胎土に砂粒を少し含む。色調は内面橙色、外側灰褐色。

75~80は窯道具である。75~79は棒状の焼台。75は残存長14.4cm、幅6.9cm、厚さ4.9cm、四周はケズリ、残存する端部は未調整である。胎土に砂粒を少し含む。76は残存長25.4cm、幅6.8cm、厚さ4.8cm。四周はケズリで、残存する端部は未調整である。表面のひび割れが激しい。胎土に砂粒を多く含む。77はほぼ完形で、長さ22.8cm、幅5.1cm、厚さ4.9cm。四周はケズリ痕がみられるが、強い火を受けて表面が劣化しており、さらに摩滅して不明瞭である。両端部は未調整。78・79は完形品。78は長さ16.0cm、幅2.9cm、厚さ2.9cm。四周はナデで、両端部は未調整。胎土は精良である。79は長さ17.1cm、幅2.6cm、器高2.5cm。両側面はナデ、上下面には板状圧痕のような波板状の凹凸がみられ、その後ナデで整えている。端部は未調整である。胎土は精良。80は煉瓦。窯体に使われたトンバリと考えられる。上下の端部を欠き、残存長7.8cm、幅10.0cm、厚さ5.1cm。四周はケズリ。堅く焼き締まり、胎土に砂粒を少し含む。

擾乱・包含層出土遺物（第26図、図版12）

81は北部擾乱南の東西に走る擾乱溝から出土した無色透明のガラス製目薬瓶である。口径15cm、器高6.1cm。横断面形は横長の八角形で、一面のみ丸く抉れた形となる。これは箱詰めする際に、



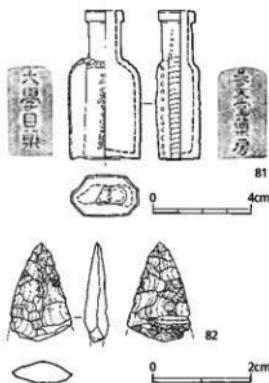
第25図 その他の出土遺物③ (1/4、71・73は1/3)

一緒にスポットを付けるための仕組みとのことである。型成形で、表に「大學目薬」裏に「參天堂薬房」の銘が入り、銘の上と左右には点線の装飾に入る。体部の側面には滑り止めと思われる波板状の凹凸が付く。參天堂薬房は參天製薬(株)の前身で、明治23年(1890)に大阪北浜で開業している。「大學目薬」は明治32年(1899)に発売され、100年以上が経過した現在でも、そのブランドが引き継がれている。大正14年(1925)には參天堂株式会社が設立されており、「參天堂薬房」の名はそれ以前の社名となり、81が製造されたのは1899~1925年の27年間となる。82は1区5号

土坑付近の包含層から出土した打製石鎌。黒曜石製で基部を欠く。残存長は2.0cm、同幅1.25cm、厚さ0.5cm、重さ0.98g。

3 小結

今回の調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭を主体として、12世紀以降の中世、さらに近現代に至る生活の痕跡を確認できた。特に1区北部で検出した2棟の竪穴住居跡は、「L」字型のベッド状遺構や出土遺物の特徴などから、西に隣接する狐塚遺跡で確認された集落遺跡の一部と考えられ、遺跡の範囲の広がりが認められる。その後、古代については遺構・遺物が減少するが、12世紀以降になると再び土地利用が活発化し、掘立柱建物跡や土坑・溝など中近世の遺構が確認されている。この時期にも狐塚遺跡2次調査など周辺遺跡との関連性が注目される。さらに遺構からの出土ではないが、近現代の野町焼に関連すると思われる製品や生産道具等を確認した。以上のように、幅広い時期にわたって、地域の歴史に関わる重要な資料を得ることができたことは、今回の調査の大きな成果であろう。



第26図 その他の出土遺物④
(81は1/2、82は1/1)

上北島野町下遺跡
図 版



1 調査地遠景（東から）



2 1区全景
(空中写真・上が東)



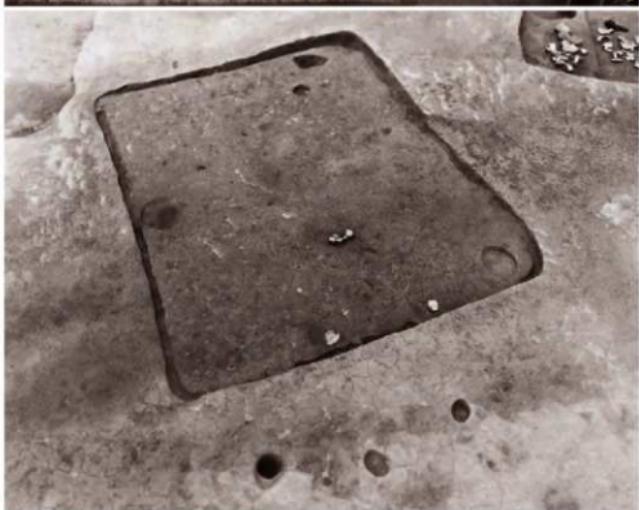
3 2区全景（北から）



1 1号掘立柱建物跡（東から）



2 2・3号竪穴住居跡
(空中写真・上が東)



3 2号竪穴住居跡(東から)



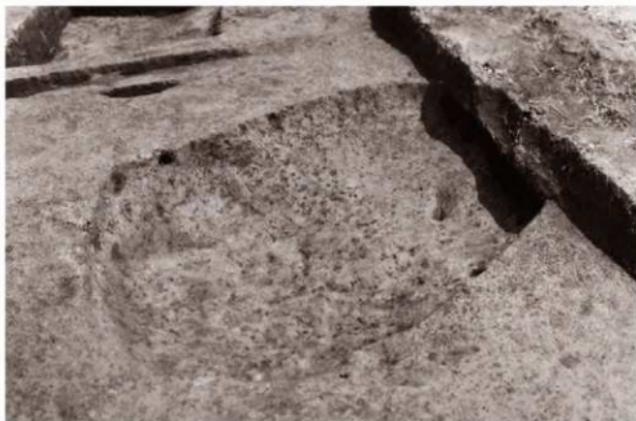
1 3号竪穴住居跡遺物出土
状況①(北から)



2 同②(ベッド上・東から)



3 同③(ベッド下・東から)



1 1号土坑(南から)



2 2号土坑(北東から)



3 3号土坑(南から)



1 4号土坑(東から)



2 5号土坑(南東から)



3 6号土坑土層断面(東から)



1 7号土坑（北西から）



2 1号溝（東から）



3 2号溝（東から）



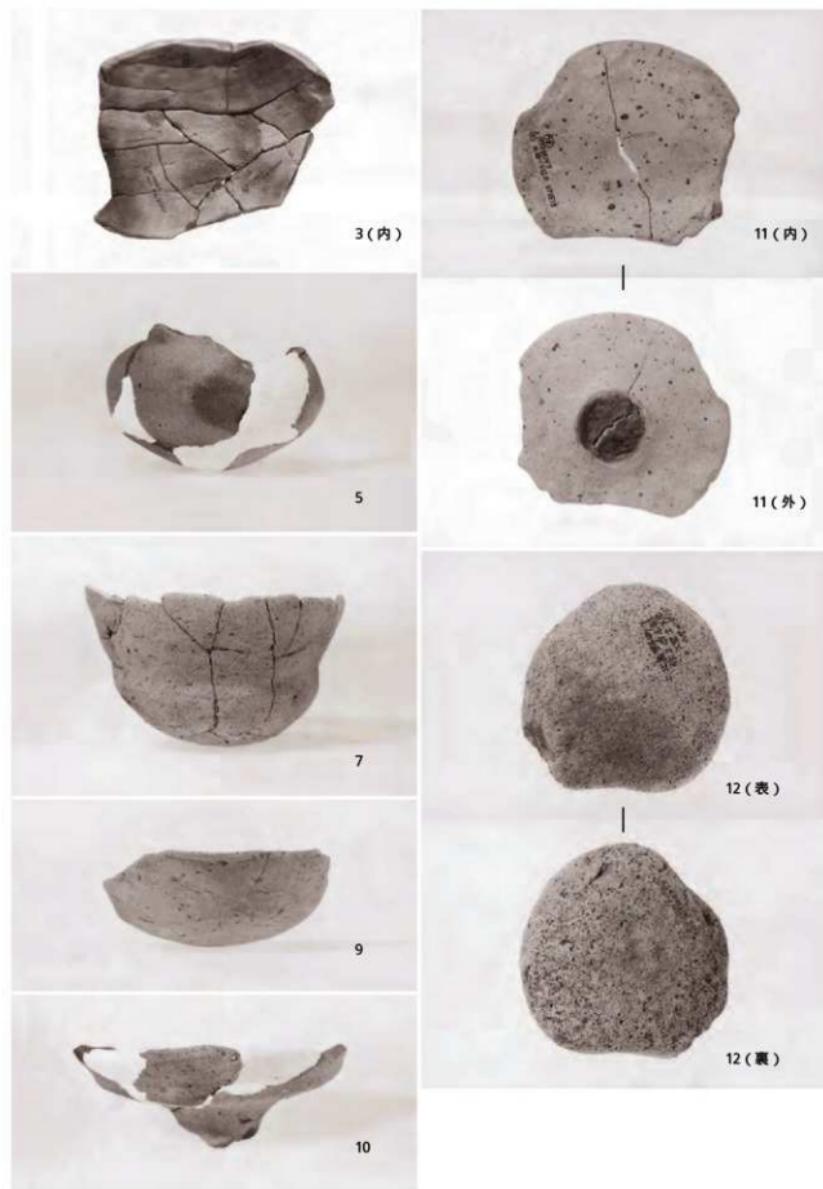
1 3号溝（東から）



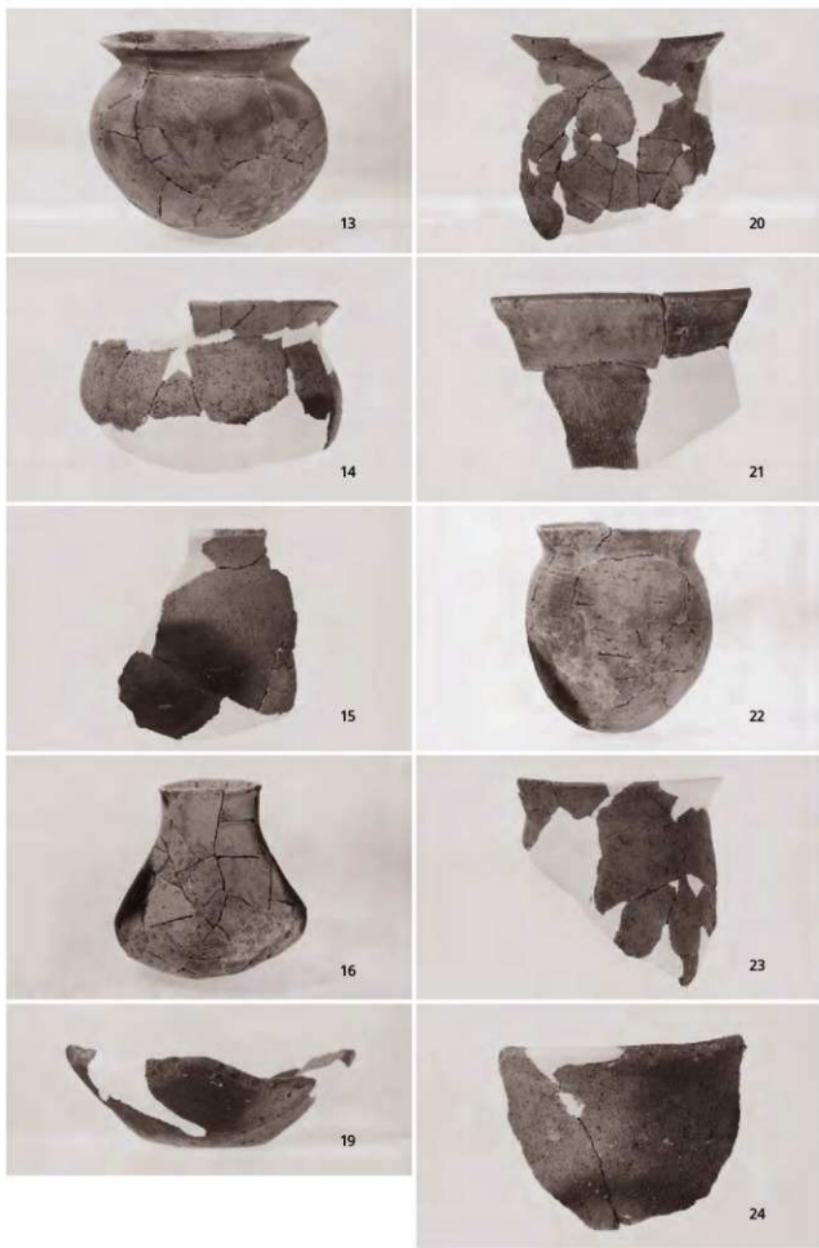
2 6号溝（西から）



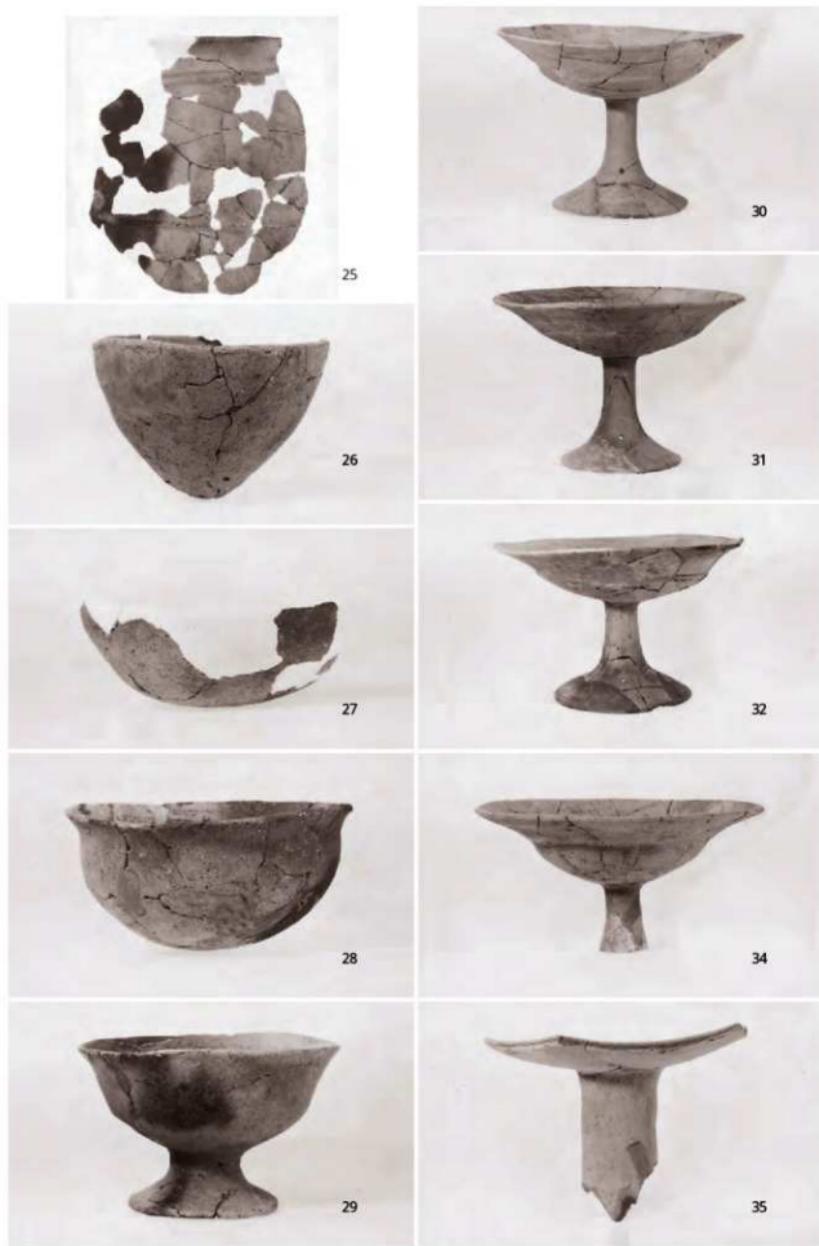
3 2号小溝（東から）



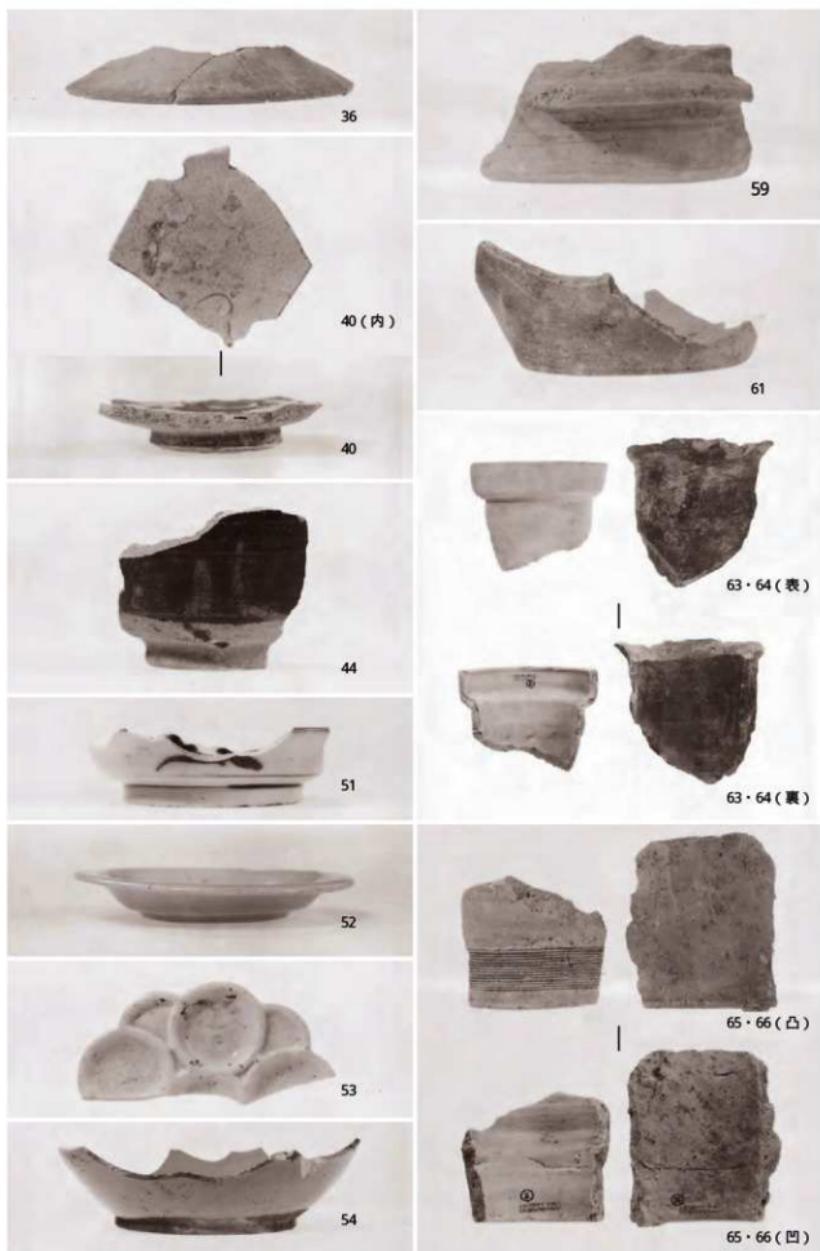
2号竖穴住居出土遗物



3号竪穴住居跡出土遺物①



3号竖穴住居跡出土遺物②



3号竪穴住居跡③・1号溝・6号溝・1区北拡張部①出土遺物



67·70(凹)



67·70(凸)



68·69(凹)



68·69(凸)



71



72(外)



73



75~80(表)



75~80(裏)



81



82(表)



82(裏)

上北島川原田遺跡

IV 上北島川原田遺跡の調査の記録

上北島川原田（かみきたじまかわらだ）遺跡は筑後市の南部、標高約9mに位置する。周辺一帯は筑後川の支流である矢部川により形成された大規模な沖積地であるが、微高地がところどころに見受けられる。周囲は広大な水田地帯が広がるが、近年、工場や住宅の進出も見受けられる。調査地点も九州新幹線の建設予定地となる以前は大日本印刷株式会社の工場用地として利用されていた。本遺跡の北約300mの微高地上には弥生時代後期を中心とする集落遺跡として学史的にも著名な狐塚遺跡が所在する。調査地点は筑後市大字上北島字川原田620-2を中心とする対象面積約1,000m²であるが、JR鹿児島本線の近接地という制約から、実際に調査可能であった面積は約300m²である。

以下、調査日誌を抜粋して記載する。

平成19年2月6日（火）

重機による表土剥ぎ開始。

平成19年2月13日（火）

ブレハブ搬入。作業員による遺構検出、掘削開始。

平成19年2月15日（木）

黒曜石（腰岳系、姫島系）出土。

平成19年2月16日（金）

東側の落ちから青磁片が出土。

平成19年2月27日（火）

全体写真撮影。

平成19年3月5日（月）

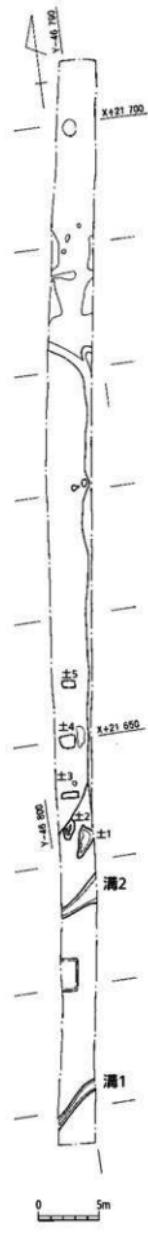
発掘機材撤収。ブレハブ撤収。重機による埋め戻し終了。

1 遺跡の概要と基本層序（第29図）

本遺跡は、JR鹿児島本線の東側に近接することから、重機を用いての掘削に際しては厳しい制約を受け、幅約3m、長さ約100mの長大なトレンチ状の調査区となった。

調査区は中央部分が高く平坦面となっており、南北部分は一段低くなっている。この高まりは線路を跨いた西側に微高地がみられ、その続きであることがわかる。中央部分東側は落ち状になっており、黒褐色粘質土が堆積している。耕作地として土地を改変した痕跡であろうか。検出した遺構は、土坑5基、溝2条、ピット等である。

基本層序は工場が建設される時点で入れられたと考えられる砂質の客土（1）が約30cmあり、その下層は旧水田時の表土と底土を含む淡黒褐色粘質土が約80cm堆積している²。地山は淡茶褐色土でやや砂質を多く含む³。遺構の埋土は淡茶褐色粘質土である³。



第27図 上北島川原田遺跡遺構配置図
(1/400)

2 検出遺構と出土遺物

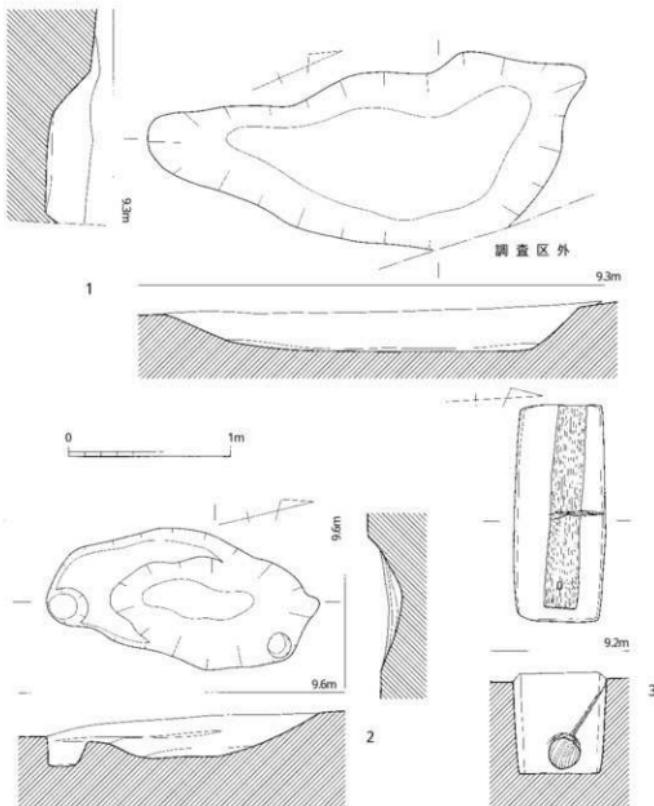
1 土坑

1号土坑（図版1、第28図）

調査区の南寄りで検出した。平面プランは東西110cm、南北270cmの不整な橢円形を呈する。東側は一部調査区外へわずかに延びる。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は淡茶褐色粘質土で、わずかに地山の黄褐色ブロックを含む。

2号土坑（図版2、第28図）

調査区の南寄りで検出した。平面プランは東西80cm、南北165cmの不整な橢円形を呈する。深さは25cmである。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。南端部と北東端部にピット状の掘り込みをもつ。埋土は淡茶褐色粘質土である。



第28図 1～3号土坑実測図 (1/30)

3号土坑（図版2、第28図）

調査区の南寄りで検出した。平面プランは東西130cm、南北55cmの長方形を呈する。平坦な底面の深さは55cmで、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面より5cm程度の位置から長さ125cm、直径約20cmの端部をきれいに切り整えられた丸太が検出された。丸太の中央には鉄製のワイヤーがしっかりと巻きつけられており、北側に向かって遺構面の部分まで延びていた。埋土は黒褐色の粘質土で黄褐色のブロックを多く含んでいた。

4号土坑（図版2）

調査区の南寄りで検出した。平面プランは直径100cm程度の隅丸方形で、深さは80cm程である。中央付近に直径10cm程の丸太を2本検出している。埋土は黒褐色の粘質土で黄褐色のブロックを多く含んでいた。

5号土坑（図版3）

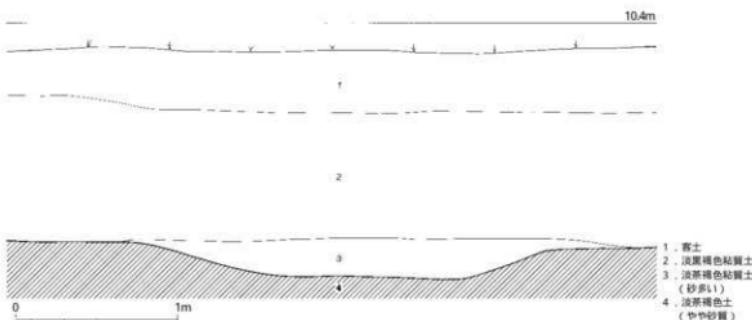
調査区の中央付近で検出した。平面プラン及び深さ、掘削の状況はともに3号土坑とほぼ同様の形態である。端部をきれいに切り整えられた丸太から巻かれ延びた鉄製のワイヤーが南へ向かって延びている。

3~5号土坑は送電線に関する遺構と考えられ、4号土坑の中央に木製電柱を立て、3・5号土坑で検出されたワイヤーで南北から支えていたものと考えられる。ただし、これだけでは不安定であるので、別方向から同様の遺構で支えていた可能性が高い。類似の遺構は同じ九州新幹線建設に係る緊急調査が行われた西牟田北原遺跡や西牟田平野遺跡（2次調査）でも検出されており、JR鹿児島本線の送電線にかかるるものと考えるのが自然であろう。

2 溝

1号溝（図版3）

調査区の南端部で検出した。北東から南東に延びる溝で両端は調査区外へ延びる。断面は幅60cm、深さ10cmの逆台形を呈する。埋土は淡茶褐色粘質土であった。遺物は出土していない。



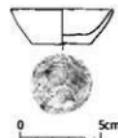
第29図 2号溝土層実測図 (1/30)

2号溝（図版3、第29図）

調査区の南寄りの部分で検出した。段落ちの際の部分に北東から南東に延びる溝で両端は調査区外へ延びている。幅は場所により差があるが、100cm程度である。深さは約20cmで、断面は逆台形を呈する。埋土は淡茶褐色粘質土で砂粒を多く含む。遺物は土師皿が1点出土している。

出土遺物（第30図）

1は土師器の小皿である。口縁部の2/3を失っているため、反転して図化している。口径6.2cm、底径3.6cm、器高2.1cmである。器表面はやや摩滅している。内面の調整はナデである。外面の調整は横方向のナデである。底部は糸切りである。胎土はわずかに細砂粒を含む程度である。焼成は良好で、色調は淡黄灰色を呈する。口縁端部の2ヶ所にスス状のものが付着しており、灯明皿として使用された可能性も考えられる。



第30図 2号溝出土土器
実測図（1/3）

（3）落ち

東側落ち（図版4、第27図）

調査区の東側の際で調査区に沿うようにほぼ全体にわたって検出した。黒褐色の埋土が堆積しており、更に東側に向かって落ちていくようである。遺物は図化していないが、鎧蓮弁文の青磁碗の口縁部小片が出土している。

3 小結

今回は新幹線の調査であるとともに、JR鹿児島本線の近接地ということから、幅3mの狭小な調査区となり、不明な点が多い。中世期の遺跡が東側に広がる微高地上に展開していることが予想される。

上北島川原田遺跡
図 版



1 上北島川原田遺跡全景
(北から)



2 上北島川原田遺跡全景
(南から)



3 1号土坑 (東から)



1 2号土坑(東から)



2 3号土坑(南から)



3 4号土坑(北から)



1 5号土坑（北から）



2 1号溝（北東から）



3 2号溝（北東から）



1 2号溝土層（西から）



2 段落ち部分（北から）



3 段落ち部分（南から）

常用前野遺跡

V 常用前野遺跡

1はじめに

常用前野遺跡は、福岡県筑後市大字常用字前野1097-1・2、1099-1番地に所在する。

本遺跡は、筑後市の南西部、JR鹿児島本線船小屋駅の約300m北の、標高8~9mの矢部川北岸の低位段丘から三角洲状低湿地への変換点に立地する。本遺跡周辺には、筑後市文化財分布地図（筑後市教育委員会2004）では、縄文時代及び中世の周知の遺跡である常用野中遺跡2（文化財番号1320-16）、志西田遺跡4（同1318-14）、志西野々遺跡5（同1318-7）などが位置する（第31図）。

調査の経緯としては、平成18年10月に本遺跡周辺の用地買収が終了し、試掘調査が可能であるという連絡を福岡県教育庁総務部文化財保護課（以下県教委と略）が独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（以下九州新幹線建設局と略）から受けたため、同年11月24日に県教委（担当：一瀬智）と筑後市教育委員会（担当：永見秀徳）が共同で試掘調査を行った。この調査では溝



常用前野遺跡2区調査状況（北から）



1. 常用前野遺跡
2. 常用野中遺跡
3. 志下鉢計遺跡第1次調査
4. 志西田遺跡
5. 志西野々遺跡
6. 志西野々遺跡（散布地）
7. 志前田遺跡
8. 志塙添遺跡
9. 志野添遺跡
10. 志下鉢計遺跡第2次調査
11. 志上鉢計遺跡第1次調査
12. 志上鉢計遺跡第2次調査
13. 尾島東鉢計遺跡
14. 鹿児島街道

凡例
■ 発掘調査終了範囲
■ 遺跡なし

境界

第31図 常用前野遺跡周辺遺跡分布図 (1/5,000)



第32図 調査区配置図 (1/1,000)

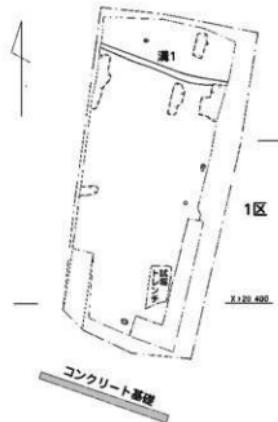
と土坑（本調査ではこの土坑は木の根痕と判断）を確認し、大字と小字名から「常用前野遺跡」と新たに名付けられた。面積にして820m²部分の本調査が必要であるとの回答を九州新幹線建設局に行った。その後、県教委と九州新幹線建設局との協議の結果、当該工事区は九州新幹線船小屋駅の設置決定が遅れることにより用地買収及び工事の進捗状況が悪く、用地買収が終了し、発掘調査が終了ないしは遺跡が存在しないと判断された箇所は早急に工事に取り掛かりたいとの九州新幹線建設局側の意向があった。そのため、急速年度内に本遺跡の発掘調査を行うとともに、本遺跡周辺の用地買収が終了した箇所の試掘調査を同時併行で進めることで協議が整った。

本遺跡の調査区は石垣で南北に区切られることから、調査の便宜上、北を1区、南を2区と名付けた。また、当初は2区南側の細長い三角形の用地は本調査対象であったが、1・2区の調査内容及び試掘調査においても遺構・遺物とも発見できていないことから、本調査は行っていない。実際に発掘調査を行った1・2区合わせた面積は265m²となる（第32図）。

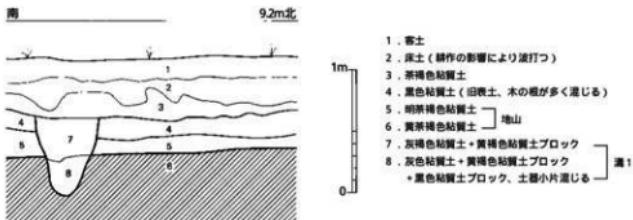
本遺跡の調査前は1・2区及び2区南側の用地はいずれも畑を耕作していた。また、現状及び試掘調査結果から、当遺跡は北から南に向かって緩やかに下がる地形であることが判明している。

調査の実際は、年明けの平成19年1月9日より北の1区から表土剥ぎを開始した。調査面積は狭いものの、表土等を約1km南に位置する船小屋駅建設予定地内に運搬する必要があったため、表土剥ぎに手間取った。15日にプレハブ等の機材の搬入を行い、翌16日より作業員を投入し、遺構検出を行った。当初予想したより遺構密度が低かったため、30日には1・2区の写真撮影・実測が終了した。その後、運搬した表土等で埋め戻しを行い、2月8日にプレハブ等の機材を搬出し、20日には埋め戻しも完了し、本遺跡の調査が終了した。

調査の概要としては、1区では溝1条、ピット5基及び電柱基礎と考えられる搅乱等を検出した。2区は畑造成の際に1.6mほど砂利等で厚く盛り土され、その造成時に表土及び床土、その下の明茶褐色粘質土も全て削られてしまっており、黄茶褐色粘質土が地山となる。そのため、木の根及び木を移植する際に重機で掘削した搅乱以外は検出できなかった。



第33図 常用前野遺跡遺構配置図(1/300)



第34図 1区西壁土層実測図 (1/40)

2 検出した遺構と遺物

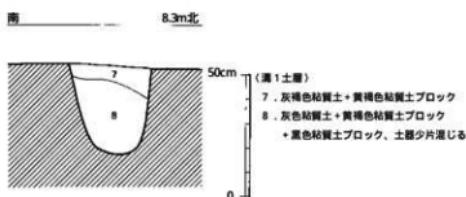
基本層序 (図版1、第34図)

先述したように、2区は大きく搅乱を受けていたため、1区西壁で基本土層を記録した (第34図)。現地表面から40cmほど下で4層の旧表土、その10cmほど下で5層の地山 (明茶褐色粘質土) を検出した。また、5層から15cmほど下の黄茶褐色粘質土 (2区地山) まで一部掘り下げを行ったが、遺構・遺物とも発見できなかった。

なお、表土掘削時に4層を掘り抜き、5層まで掘削したので、1区は10cmほど下げたレベルで調査を行っている。

1号溝 (図版2、第33・35図)

1号溝は1区北寄りに位置する、直線的な東西溝である。先述したように旧表土である4層から切り込み、幅3cm、深さ10cmほど足したもののが本来の計測値となる。溝東西はいずれも調査区外まで伸び、現状で長さ8.2m以上、幅は平均で35cm程度、深さは東端が27cm、中央が27cm、西端が31cmで、東→西に傾斜する溝となる。溝埋土は2層に分かれ、下層の8層には中世と考えられる土師器片を少量含む。直線的かつ「U」字状の断面形態から田んぼの耕作に伴う溝と考えられる。埋土に中世土器片は含むものの、旧表土から切り込むこと、また溝埋土から時期的にさほど遡るものではないと考えられる。



第35図 1号溝土層実測図 (1/20)

ピット群 (第33図)

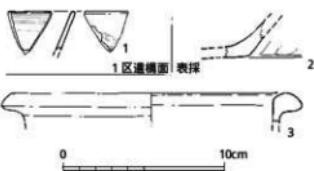
1区東側で計5基のピットを確認した。いずれも5層から切り込み、深さは20cm前後 (本来は30cm前後) と浅い。埋土は明茶褐色粘質土が主体であり、1号溝よりは時期的に古いことは確実であるものの、出土遺物がないため時期は不明である。

出土遺物（図版2、第36図）

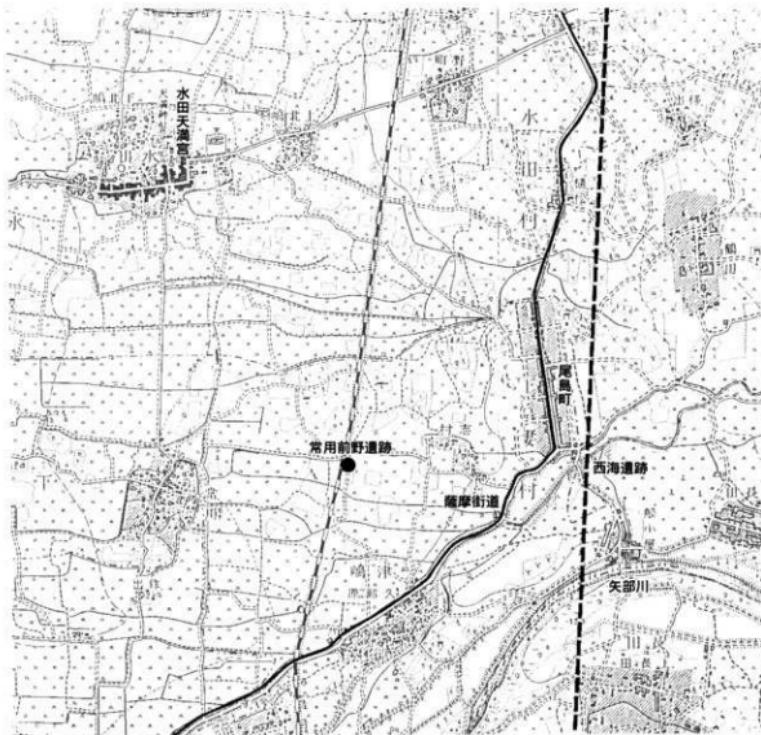
遺物は1区からビニール袋1袋分出土した。いずれも小片で、図化できたのは以下の3点のみである。

1は1区遺構面出土の陶磁器碗。外面には唐草文、内面には上下2条の界線内に松葉状の文様を手描きで描く。黄色味がかった透明釉を全面に施釉し、胎土は白色。

2・3は1区表採品で、いずれもローリング痕が顕著である。2は弥生時代後期後半の甕底部。外外面ナデ調整を施し、外面には二次加熱痕が認められる。色は橙褐色。3は奈良時代に属すると考えられる小型土師器甕口縁部。外面～口縁部内面は横ナデ調整であるが、内面頸部以下はケズリ調整を行う。色は黄褐色。



第36図 出土遺物実測図(1/3)



第37図 常用前野遺跡地形図(1/20,000)

(明治33年大日本帝国陸地測量部作成)

3 小結

本遺跡の調査では、予想に反して溝1条及びピット5基検出できたのみである。本遺跡東側の志西野々遺跡では縄文時代早期の石組み炉、同時期の包含層、中世～近世の溝を確認し、志西田遺跡では縄文時代の落とし穴状遺構及び縄文時代早期の押型文土器が発見されている。しかし、第31図を見ると、縄文時代の遺構・遺物は志西野々遺跡及び志西田遺跡より西側には広がらないことが、今回の調査及びこれまでの本遺跡周辺の試掘調査結果から明らかになった。

本遺跡は低位段丘上に立地する縄文時代～近世までの複合遺跡である志遺跡群の周辺地であり、本遺跡周辺では中世以降の地割りや田畠の耕作に伴う溝が今後も発見される可能性がある。また、本遺跡周辺は低位段丘と三角洲状低湿地が入り組む複雑な地形であるため、今後も試掘調査など事前調査を蓄積することが求められる。

参考文献

- 立石真二 2000 『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)』 筑後市文化財調査報告書第27集 筑後市教育委員会
永見秀徳・小林勇作 2003 『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅳ)』 筑後市文化財調査報告書第51集 筑後市教育委員会



常用前野遺跡の工事状況（北から）



常用前野遺跡の工事状況（東から）

常用前野遺跡
図 版



1 1区西壁土層（東から）



2 1区全景（北東から）



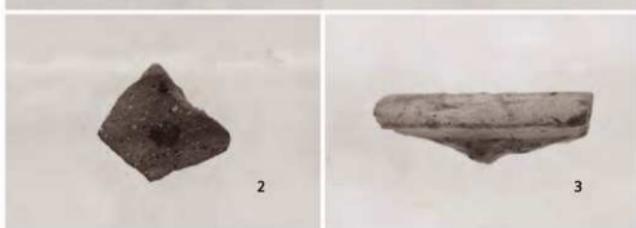
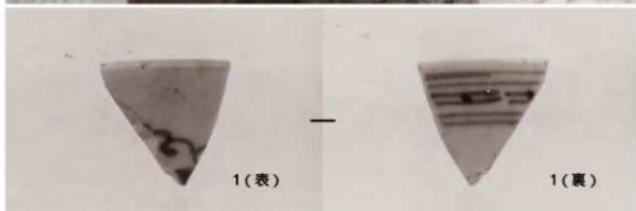
3 2区全景（北北東から）



1 1号溝(東から)



2 1号溝土層(東から)



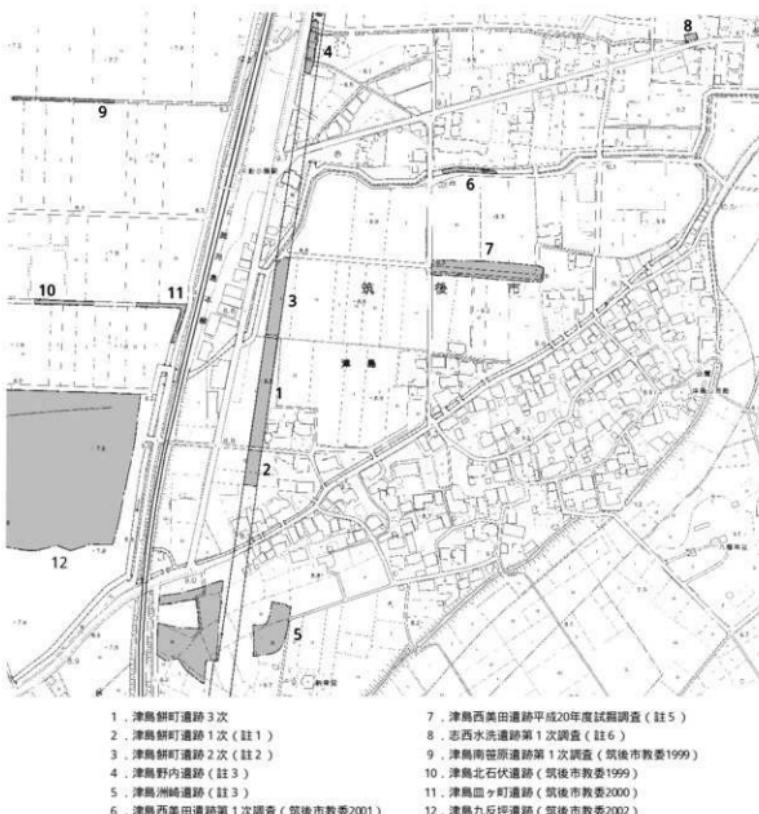
3 出土遺物

津島餅町遺跡 3次調査

VI 津島餅町遺跡3次調査の記録

1 調査の概要

津島餅町遺跡は、筑後市西南部の矢部川下流の北岸河岸段丘後背湿地に位置しており、矢部川支流の松永川が二又に分かれる微高地に位置する。遺跡の所在する津島地区や北に隣接する志地区には島状に集落が点在しており、松永川によって形成された氾濫原の微高地に集落が営まれていたようだ。津島餅町遺跡は津島集落北西の標高8.3mの圃場整備を受けた水田地帯に位置している。



第38図 津島餅町遺跡3次周辺地形図(1/5,000)

本遺跡の所在する九州新幹線船小屋工区については、遺物散布地にあたっており、JR在来線を挟んだ西側には同様の立地で、弥生時代の集落遺跡である津島九反坪遺跡（筑後市教委2002）・津島北石伏遺跡（筑後市教委1999）・津島皿ヶ町遺跡（筑後市教委2000）が存在することから、試掘調査を行う必要があった。独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線局から平成17年6月8日付けで試掘調査依頼文書を受け、用地取得後、平成18年11月28～30日に福岡県教育庁文化財保護課が筑後市教育委員会の立会いの下で試掘調査を実施した。その結果、大字津島652-673-705番地の区間で遺構・遺物が確認されたため、本調査が必要である旨を回答した。

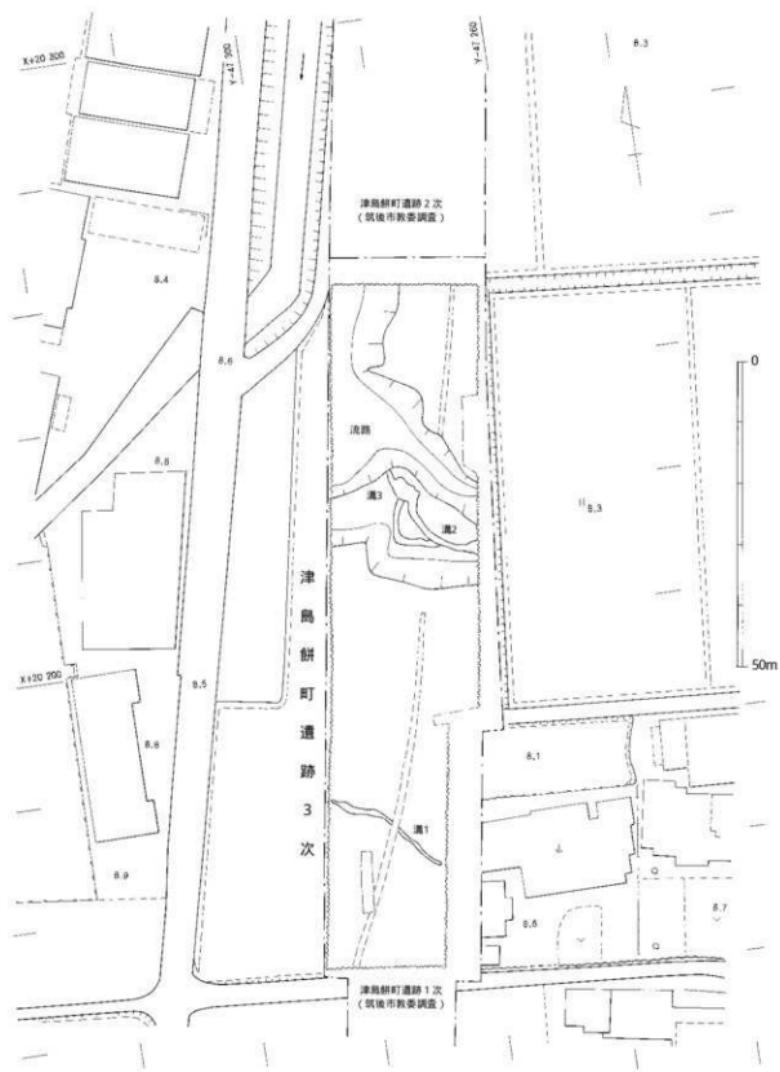
本調査は当初、筑後市教育委員会が行い、軟質土壌で湧水もあることから調査に先立って工事でも使用する鋼鋸矢板を打つことになっていた。しかし、試掘結果から土量が多く遺構密度も高いと見られていたため、調査期間を短縮する目的で対象範囲を3区画に分け、筑後市教育委員会が2区画を、福岡県教育庁文化財保護課が1区画を担当するよう依頼された。このため本調査対象範囲の内、南区を津島餅町遺跡1次、北区を2次、中区を3次と呼称することとし、3次調査は大字津島672-2(D)番地の2,576m²が本調査対象範囲となった。

3次調査着手時に1・2次調査区はすでに本調査を行っており、表土剥ぎは津島餅町遺跡1・2次で使用していたバックホー(0.7t)を引き続き用いて、平成19年9月21日から実施した。圃場整備で190cmに及ぶ厚い表土があったため土量が多く、これを排土仮置き場までトラックで搬出する必要があったため、表土剥ぎ作業が渉らず、9月26日に作業員を入れることになった。隣接する2次調査区では竪穴住居跡や土坑などの遺構が検出され、流路からも遺物が出土していたが、3次調査区では溝状遺構とピットがわずかに検出されるのみで、遺物もわずかだったので、平板測量で遺構全体図を作成し、必要に応じて個別に実測図を作成することにした。10月30日にラジコンヘリコプターによる全体写真を撮影した。調査終了後工事に着手することから、埋め戻しは工事業者が行うことになり、10月31日に用地を引き渡して撤収した。

2 遺跡の概要と基本層序

3次調査区内は、中央の谷部に時期不明の自然流路があり、これを挟んで南北2つの地区に分かれる。中央部の谷の南斜面には溝状遺構が2条検出され、流路に対して垂直方向に入る無数の小溝は植物が押し倒されて腐ったもののように見られた。これを掘削してみたが遺物は出土しなかった。谷の北側では2次調査区で検出されていた旧河川の落ち際部分が検出された。旧河川の最深部は調査区外にあり、2次調査区で見られるような埋土内の遺物は発見できなかった。南側は緩やかな斜面になっており、その斜面頂部の平坦面の北端に細い溝状遺構が検出された。これ以外は基盤層に入る黒色の染みや倒木痕であり、試しに倒木痕を掘削してみたが遺物を得られなかった。結果として、本調査区からは溝状遺構が3条とピット少数が確認された。

基本層序は第40図・図版2に示すとおりである。表土から55cmまで客土が堆積しており、その中から陶器の土瓶蓋と小杯が出土しているので明治から大正時代の所産の可能性高い。その下の層序では、4層は泥湿地の堆積層であり、基盤面直上で石器が出土している。この上の砂質層(3層)は水が流れようになつたことを示唆している。2層は上位が平坦な土質の層であることから、2層の堆積で安定した生活面が得られたものと考えられる。基盤層は、高い所は明黄白粘土層だが、谷部や旧河川の側はグライ化して暗青灰色化している。



第39図 調査区配置図 (1/800)

3 検出遺構と出土遺物

1 溝状遺構

1号溝状遺構（図版2-3、第41・42図）

調査区南部の平坦面北端に位置し、北東-南西方向に走る。直線的ではなく、地形に合わせて西に傾斜して掘られたものだろう。最大幅約150cm、最も深い所で23cm程の小さい溝である。北壁は北に緩やかに立ちあがる部分が多く、台地平坦面を区画する目的で掘られたものと考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

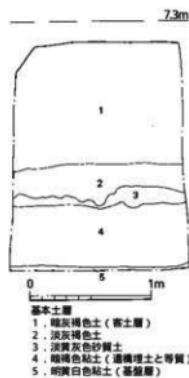
2号溝状遺構（図版2-3、第41・42図）

調査区中央部の谷の南斜面に位置し、谷に沿って湾曲しながら北東-南西方向に走り、西に向かって傾斜している。溝端部に植物の倒れた痕跡が多く残っており、切り合いが明瞭でなかつたためこれを一緒に掘った部分がある。最大幅約250cm、最も深い所で46cm程の溝である。黒色土を埋土としていたため明瞭に検出され、3号溝状遺構を切っていた。

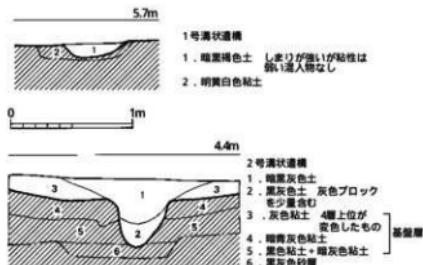
遺物は掲載に耐えないが、外面ハケ、内面ケズリの器種不明の胴部片が1点だけ出土している。調整から見て弥生後期のものと思われる。

3号溝状遺構（図版1、第42図）

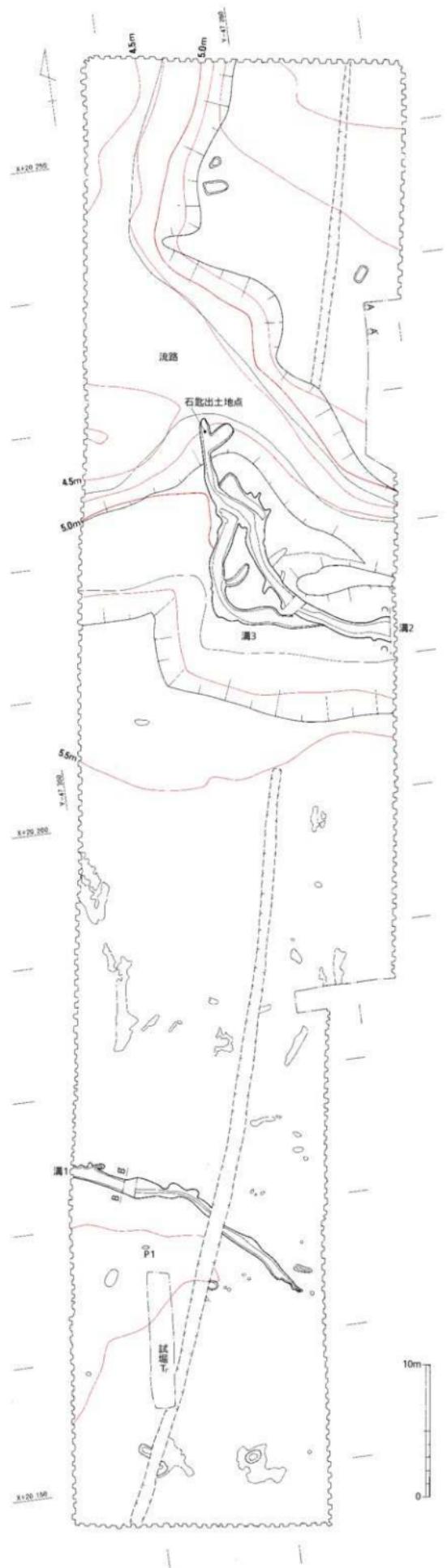
調査区中央部の谷の南斜面に位置し、2号溝状遺構から派生するように南西に大きく湾曲している。谷地形自体がこの溝状遺構と同様に湾曲する部分があるので、流路の変化に合わせて掘ったものと考えられる。2号溝状遺構との切り合いは明瞭で、最大幅約145cm、最も深い所で13cm程の小さい溝である。遺物は出土していない。



第40図 基本層序図 (1/40)



第41図 1・2号溝状遺構土層断面図 (1/40)



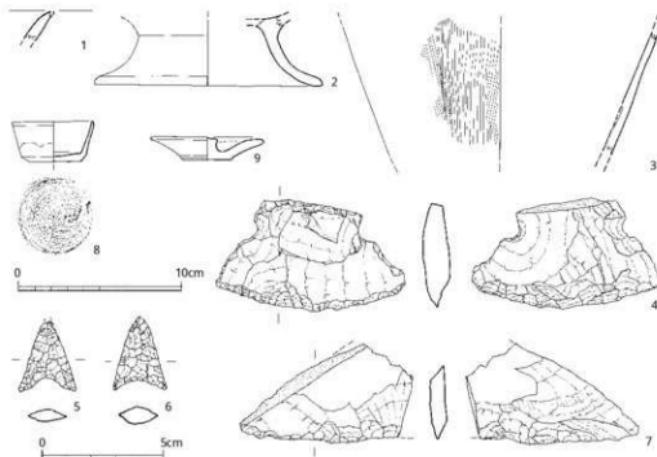
第42図 津島餅町遺跡3次遣構配置図(1/300)

2 その他の遺物（図版3、第43図）

1・2はピット1出土で、1は布留系裏の口縁形状に近い。小片のため正確でないが、径は23cm前後に復元できる。内外変色なく、黄白橙色を呈する。2は高台付きの器種だが、内底が平坦であることから鉢と考えられる。内外橙色を呈する。

3・4は流路出土である。3は楕の胴部片で、外面縦ハケ、内面炭化物付着で摩滅し、調整不明。外面の暗褐色と内面の黒褐色は、青灰色粘土の影響で変色したもの。調整と器形から弥生後期の所産か。4はサヌカイト製の横型石匙で、上面が素面で長い剥片を横にして整形している。刃部は両刃だが偏りあり。側面は抉り部を作つてつまみとしているが、すでにつまみというより緊縛部に近い。36.6gを測る。

5・6は遺構面出土のほぼ完形のサヌカイト製石鎌で、全面風化している。5は先端が欠損している。1.8gを測る。6は先端の剥離が新しく偏っていることから先端欠損後再加工した可能性が高い。2.6gを測る。7は削器で、上面が素面で斜めに長い剥片から整形している。上部と側刃を欠損しており、全体形状は不明だが、素面側が長い偏二等辺三角形状であろう。20.2gを測る。8・9は客土出土の陶器で、8は完形の小杯で、外面上半から内面にぶい淡黄緑灰色の灰釉が掛けられ、外面下位から外底は露胎である。露胎部が胎とほとんど変わらず、金雲母が多く含み土師質に近いことから焼成は低火度である。口クロア形で底部糸切り。外底部に胎目跡3つあり。9は蓋で穿孔がないので急須でなく小型土瓶とセットになるだろう。外底は糸切りで、上面はつまみ周囲の窪みにのみ鉄釉を掛けている。胎が土師質であることから低火度の焼成で、内面の口縁部のみ橙色で他は黄橙色であることから、土瓶と重ね焼きしたものと考えられる。



第43図 津島餅町遺跡3次出土遺物実測図（4～6は1/2、他は1/3）

4 小結

津島餅町遺跡3次調査では、中央の谷部を挟んで南北2つの平坦面が検出された。北側平坦面は西側に旧河川があるため調査区内の平坦面が非常に狭く、また旧河川の底面が調査区外に延びていたため、2次調査区のような平坦面の遺構や旧河川からの遺物は検出されなかった。

谷部の流路は旧河川に流れ込む小河川であり、埋土は旧河川と同様にグライ化した暗青黒色粘土で、斜面には倒れた植物の痕跡が多く残っていた。流路内や流路斜面の遺構検出面からは甕の胴下位片と石器が出土している。石器は集中して出土しているので狩猟時のものは考えにくい。形態から時期を特定しにくい。津島餅町1次で縄文早期のものと思われる落し穴が発見されており、志地区に縄文早期集落があるが、風化の程度や形態から早期のものとは考えにくい。むしろ、近接する津島九反坪遺跡（筑後市教委2002）で出土した弥生時代前・中期のスクレーバーに近いので、土器と同様に弥生時代に伴うものと考えるべきだろう。

谷南部は1号溝状遺構やピット1から出土する遺物から古墳時代前期の集落と考えられる。谷南側の斜面には倒木痕が多く、ピットは頂部平坦面に広がっていることから、北部との間の空闊地が大きく、谷を挟んで2つの集落地が存在しており、南北の平坦面はどちらも集落の端部にあたるものと考えられる。3次調査区内は端部であるため、2つの集落地の関係はわからない。それについては筑後市教育委員会が調査した津島餅町遺跡1・2次の報告に譲りたい。（註1・2）

なお、客土から出土した陶器の小杯は独特の形状をしており、蓋は小型で上面の窪みにのみ施釉されていることから、汽車土瓶の杯と蓋と考えられる。汽車土瓶は、小杯を倒立して蓋の窪んだ部分にセットする小型土瓶であり、消耗品であったことから、駅周辺から大量に出土することがある。（註7）遺跡の北西に位置するJR船小屋駅は「九州鉄道」の駅として1891（明治24）年に開設されているので、駅周辺で廃棄されたものが混入した可能性がある。（註8）

註

- 註1 津島餅町遺跡1次 筑後市教育委員会調査、平成20年度報告予定
- 註2 津島餅町遺跡2次 筑後市教育委員会調査、平成20年度報告予定
- 註3 津島野内遺跡 筑後市教育委員会調査、平成20年度報告予定
- 註4 津島洲崎遺跡 筑後市教育委員会調査、平成20年度報告予定
- 註5 津島西美田遺跡（試掘調査）は包含層を検出したのみなので本調査に至らなかった
- 註6 志西水洗遺跡（第1次調査）は包含層を検出したのみなので本調査に至らなかった
- 註7 國見徹2000「汽車土瓶」『季刊考古学』第72号 雄山閣
- 註8 児玉真一編1993『福岡県の近代化遺産』福岡県文化財調査報告書第113集 福岡県教育委員会

引用・参考文献

- 筑後市教育委員会1999『筑後西部第2地区遺跡群（I）』筑後市文化財報告書第21集
- 筑後市教育委員会2000『筑後西部第2地区遺跡群（II）』筑後市文化財報告書第26集
- 筑後市教育委員会2001『筑後市内遺跡群（II）』筑後市文化財報告書第33集
- 筑後市教育委員会2002『津島九反坪遺跡』筑後市文化財報告書第42集
- 筑後市教育委員会2004『筑後市文化財分布地図』

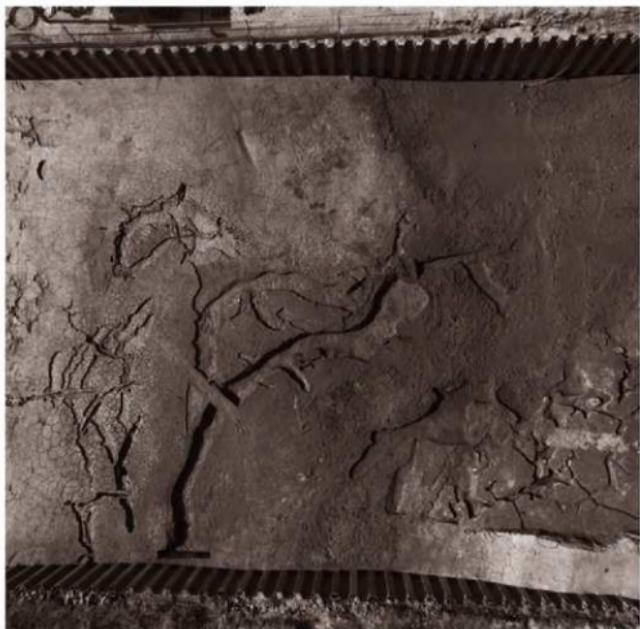
津島餅町遺跡3次調査
図 版



1 津島餅町遺跡 3次調査遠景（西上空から）



2 同上全景（上空から）



1 流路・1号溝状遺構
(上空から)



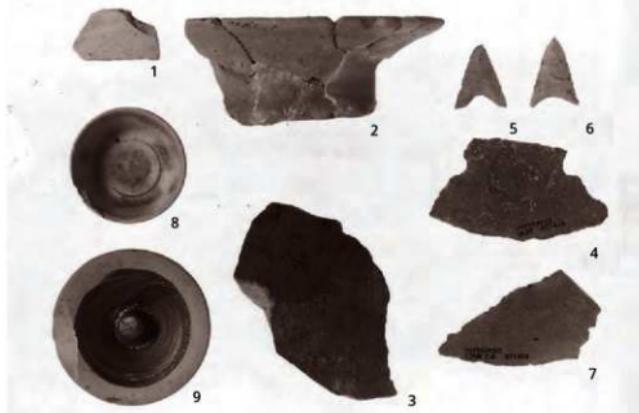
2 基本層序(西から)



1 1号溝状遺構土層断面
(西から)



2 2号溝状遺構土層断面
(西から)



3 出土遺物

VII まとめ

1 上北島野町下遺跡における出土遺構・遺物について

1 3号住居跡・ベッド状遺構

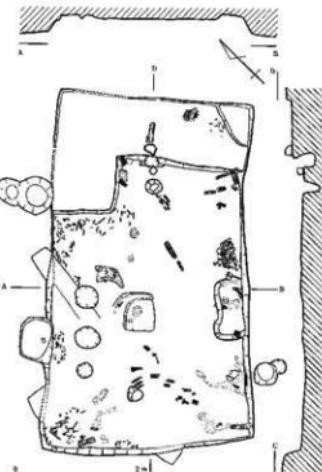
1区北端部で検出した3号竪穴住居跡は、調査区北側の水路に向かう落ちにより北側半分~1/3が失われていたが、南壁沿いに「L」字型のベッド状遺構を良好に検出できた。昭和44年(1969)の狐塚遺跡の調査では、同様のベッド状遺構を持つ竪穴式住居が3棟検出されている。ここではその比較から、3号竪穴住居跡の構造について若干の考察を行う。

まず3号竪穴住居跡についてみると、主軸北東~南西で、南北の残存長3.7m以上、東西長は4.1mの方形プランである。主柱穴は主軸上に1基、推定中央部に炉跡がある。ベッド状遺構は南西壁に取り付き、床面からの高さは20cmを測る。

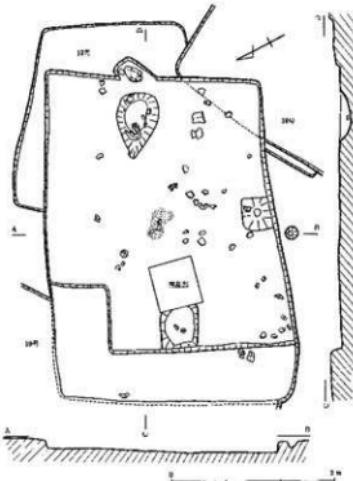
次に、狐塚遺跡で調査された竪穴住居跡は、2次調査を含めて18棟。このうち「L」字型ベッド状遺構を持つものは、1次調査における2・10・11号竪穴である。2号竪穴は、主軸は北東~南西で長辺5.8m×短辺3.4mの長方形プラン。主軸上に2つの主柱穴が並び、床面の中央に炉跡を配する。ベッドは北東の短辺に沿って付き、高さは20cm。「L」字に曲がる長辺と逆の長辺中央に接して、深さ15cmの長方形の貯蔵穴ピットが設けられる。

10号竪穴は主軸は北東~南西で長辺約6m×短辺約4mの長方形プラン、主軸上に2つの主柱穴が並ぶ。炉跡は不明。ベッドは南西の短辺に沿って付くが、高さは上部が削られて不明。「L」字に曲がる長辺と同じ側の北隅に深さ30cmの方形の貯蔵穴ピットが設けられる。

11号竪穴は主軸が北西~南東で長辺6m×短辺4.2mの長方形プラン。主柱穴は不明。床面の中央に炉跡を配する。ベッドは北西の短辺に沿って付き、高さは18cm。「L」字に曲がる長辺と逆の長辺中央に接して、深さ20cmの方形の貯蔵



第44図 狐塚遺跡2号竪穴



第45図 狐塚遺跡11号竪穴

穴状ピットが設けられる。

このように3号竪穴住居跡と1次調査出土の3棟は平面プラン、ベッドの配置・高さ、炉跡の位置などよく似た特徴を持つ。従って、そこから3号竪穴住居跡の欠損部分を復元することができよう。つまり主軸は北東-南西で、長辺南北約6m、短辺東西4.1mの長方形プラン。主柱穴は主軸上に2つ並ぶ。床面の中央部に炉跡がある。ベッド状遺構は短辺の南西壁に取り付き、床面からの高さは20cmを測る。そして失われた部分の床面には方形の貯蔵穴状のピットが設けられていた可能性が高い。

1 2・3号住居跡出土遺物について

本調査における2・3号竪穴住居跡は、いずれも遺構の一部が失われて検出されたが、埋土下層・床面からは、比較的良好な形で遺物が出土した。ここでは、昭和45年(1970)の狐塚遺跡調査報告における土器編年に依拠する形で、出土遺物と住居跡の位置づけについて考えてみたい。

まず、多くの遺物が出土した3号竪穴住居跡であるが、出土土器の特徴として高環が相対的に多く、その残りの良さが挙げられる(30-35)。そして口縁部が残る6つすべてが環上半部の湾曲が大きく、口径が30cmを超えるものだった。また調整に関しては甕や壺の一部を除いてケズリがみられず、全体的に丁寧なハケメやミガキ調整が目立つ。さらに大型の甕(25)を除き、甕・壺の口縁や肩に刻み目を持たない。

次に2号竪穴住居跡だが、高環は3号住居跡出土品と比較して环下半部は扁平であり、环上半部から口縁部が直線的に伸びる古式土師器に近いものが想定される(10・11)。また、器種に小型丸底壺・鉢がみられ(5・7)、調整では鉢にケズリが多様されている(7・8・9)。さらに山陰系二重口縁壺では、口縁が短く稜も退化している(4)。

以上のことから3号住居跡出土土器は概ね上北島II期の前半、2号住居跡出土土器は上北島III期に含まれ、住居跡の先後関係も3号→2号で新しくなると考えられる。

3 野町焼について

今回、「1区北拡張部出土遺物」として報告した遺物の中に、近隣の野町焼と思われる素焼きの製品がある。種類は多岐にわたっており、火鉢・植木鉢・火消し壺・甕・いもがま・土管・瓦、そのほか窯道具も確認できた。この機会に野町焼について述べておきたい。

野町焼は現在の筑後市大字野町一帯で近世に発生した焼き物で、諸処の記録によると、もともとは1.3kmほど西方にある水田の水田焼が移されたものという。水田焼は天正年間(1573-92)に本田能登が起こしたといわれる素焼きの焼き物である。能登より5代目には藩御用窯を命ぜられ、御用土器師として素焼きの焙烙である半田土鍋を毎年献上している。そのような御用窯と併せて甕・鉢類など日用雑器の製作が本田家、そして分家の近藤家によって盛んに行われ、18世紀以降には分家・職人が周辺地域に広まり、水田焼に類する焼き物が各地で誕生していった。野町焼もその一つで、正徳年間(1711-15)に、水田焼の職人・近藤源八が、野町の同姓の家に養子となり、同地で窯業を始めたのがその興りという。

以下は『水田の半田土鍋焼』に拠る。藩政期から明治にかけては、まとまった窯場が数件あって、野町焼と称していたという。昭和48年(1973)当時では、窯元は近藤四郎家1軒のみ(現・

光窯)で、近隣では「カメヤ」と呼ばれていた。四郎氏は源八から7代目にあたるが、6代目の正巳氏は時代の波に沿うべく、植木鉢や土管、工作用教材の製作に乗り出したという。そのほかには肥だめ・屋根瓦(赤瓦)・便所がめ、焼いもかま等が焼かれていた。昭和12年(1937)頃から組合が組織され、製品の販売に力が注がれた。特に土管だけの組合も作られたそうだが、塩化ビニール管に押されつつある状況にあった。だが植木鉢は今後需要が増える見込みがあり、生産に力が入れられている。原料の粘土は伊万里・武雄などから購入している。

2 おわりに

以上、福岡県教育委員会が筑後市において平成18・19年度に発掘調査を実施した九州新幹線鹿児島ルート建設工事関係の発掘調査成果について述べてきた。上北島野町下遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の狐塚遺跡から続く集落の広がりや、中世における状況、さらに野町焼など、地域の歴史を考える上で、幅広い時期にわたる重要な資料を得ることができた。上北島川原田遺跡では中世期の遺跡の広がりを確認することができた。常用前野遺跡では、遺跡東の県道船小屋停車場水田線など周辺の試掘調査結果と併せて、縄文時代の志西野々遺跡及び志西田遺跡の範囲が、さらに西には広がらないことが明らかになった。津島餅町遺跡3次調査では、弥生時代と考えられる石器が集中して出土し、また古墳時代前期の集落の一部を確認した。集落の中心は津島餅町遺跡1・2次調査地にあたるため、その具体像は筑後市教育委員会の報告を待ちたい。

今後は、一連の調査によって得られた貴重な資料を積極的に活用し、埋蔵文化財に対する普及啓発を促進することにより、調査主体としての責務を果たしたい。

引用・参考文献

- 『狐塚遺跡』筑後市教育委員会 1970
- 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IX』福岡県教育委員会 1977
- 筑後市文化財報告書第77集『狐塚遺跡II』筑後市教育委員会 2007
- 蒲原宏行「古墳時代初頭前後の土器編年—佐賀平野の場合—」(『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集 佐賀県立博物館・美術館 1991)
- 宮田浩之「北部九州地域」(『古式土師器の年代学』第I部古式土師器編年集成 (財)大阪府文化財センター 2006)
- 『筑後市史』第1巻 筑後市 1997
- 淺野陽吉『筑後陶磁考』 金文堂 1935
- 右田乙次郎『水田の半田土鍋焼』筑後市教育委員会・筑後郷土研究会 1973

報告書抄録

ふりがな	かみきたじまのまちしたいせき かみきたじまかわらだいせき つねもちまえのいせき つしまもちまちいせきさんじちょうさ						
書名	上北島野町下遺跡 上北島川原田遺跡 常用前野遺跡 津島餅町遺跡 3次調査						
副書名	福岡県筑後市所在遺跡の調査						
番次							
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第13集						
編著者名	一瀬 智・進村真之・大庭孝夫・秦 審二						
編集機関	福岡県教育委員会(総務部文化財保護課)						
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL092-651-1111 FAX092-643-3878 E-mail: kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp						
発行年月日	平成21(2009)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
かみきたじまのまちしたいせき 上北島野町下遺跡	ふくおかげんちくごしおあおざかみきたじま 福岡県筑後市大字上北島	40211	33° 12' 4"	130° 29' 47"	2007.2.21 ~ 2007.6.18	1,720m ²	九州新幹線 鹿児島ルート 建設
かみきたじまかわらだいせき 上北島川原田遺跡	ふくおかげんちくごしおあおざかみきたじま 福岡県筑後市大字上北島	40211	33° 11' 52"	130° 29' 44"	2007.2.6 ~ 2007.3.5	300m ²	
つめをもとめのいせき 常用前野遺跡	ふくおかげんちくごしおあおざつめを 福岡県筑後市大字常用	40211	33° 11' 11"	130° 22' 37"	2007.1.9 ~ 2007.2.20	265m ²	
つしまちまちいせき さんじょうよう 津島餅町遺跡 3次調査	ふくおかげんちくごしおあおざつしま 福岡県筑後市大字津島	40211	33° 10' 56"	130° 29' 35"	2007.9.21 ~ 2007.10.31	2,576m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上北島野町下遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居・土坑 獨立柱建物跡・土坑・溝	弥生土器 土師器 陶磁器 土師質土器	・弥生時代終末期～古墳時代前期前半の竪穴住居跡出土土器は、当地域の土器様相を把握する上で重要		
上北島川原田遺跡	集落	中世	土坑・溝	土師器・陶磁器・黒曜石			
常用前野遺跡	集落	弥生時代	溝・ビット	弥生土器・陶磁器			
津島餅町遺跡 3次調査	集落	弥生時代	溝状遺構	弥生土器・石器			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 20	登録番号 2

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第13集

上北島野町下遺跡

上北島川原田遺跡

常用前野遺跡

津島餅町遺跡 3次調査

平成21年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東比恵7-7

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3丁目21番10号
TEL(092)411-0544